

Z32-B88

島崎藤村 友島生馬 監修

金の船

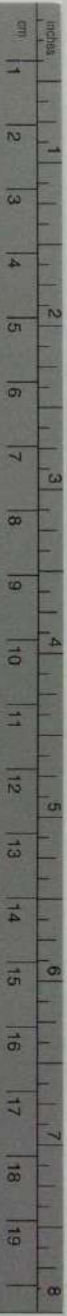
一月一號



第一號



大正八年十月十八日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

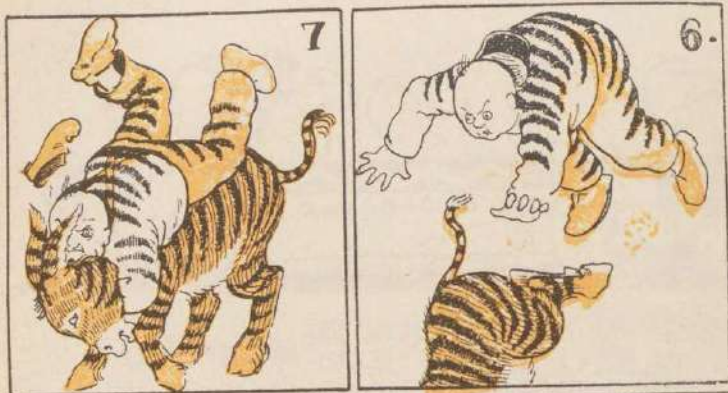


Kodak Gray Scale

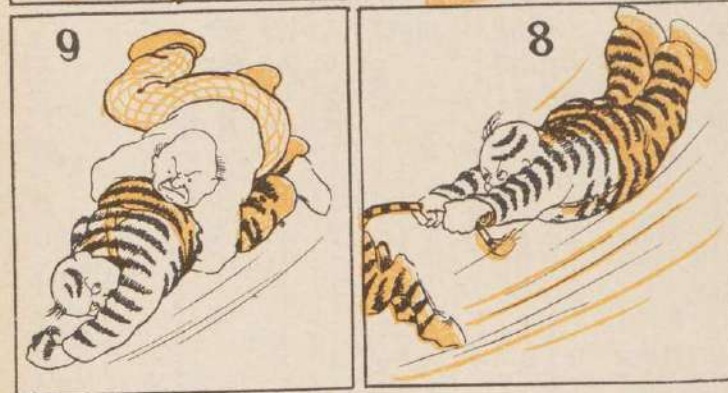
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



6.



8



10



1
いまは
是れで叔父さんの
馬と同じやうに綺麗になつた。



3

叔父さん、それは
僕の馬ですよ。

さあ、
お家へ歸らう。



2

おや！
お前はどうして
此處へ出て
きたのだ。



5

わ、わ、危い。



4

なぜ歸らうとしないのだ
うーんときた。



金の船 一月號 第二卷第一號

人まね (表紙、石版刷) 岡本歸一
 驢馬 (繪話、二度刷) 岡本歸一
 花の女神 (口繪、三色版) 岡本歸一
 馳の嫁入り (曲繪) 萱間三平
 馳の嫁入り (童話) 野口雨情
 蝙蝠の話 (童話) 島崎藤村
 山さち川さち (童話) 沖野岩三郎
 正夫さんと犬の子 (童話) 有島生馬
 太陽の船出 (童話) 與謝野晶子
 花の咲かぬ國 (童話) 坪井美都子
 神穩しの話 (童話) 灰野庄平
 菜の花と小娘 (童話) 志賀直哉
 花がゆれる (童話) 松尾孝輔



謎 (童話) 西條八十
 白い雀 (童話) 二松操
 鶯鳥の王様 (童話) 齋藤佐次郎
 雪の神様 (童話) 横山壽篤
 提燈祭 (童話) 橘逸雄
 銀の匣 (童話) 西川勉
 雪 (幼年詩) 志
 徒歩競走 (遠方) 志
 橋の上 (自由畫) 志
 通信 志
 挿繪 岡本歸一
 製版 田中松太郎

お伽夢雙六 (石版刷) 岡本歸一
 附録





花の女神

花の王様の前に薔の女神と、ばらの女神と、百合の女神が
集りました。女神たちは雪の中に立って、一つの花をお造り
になりました。花の王様はその花に向つて

「この花は雪の中でも咲け、冬も凍らず、夏もしほれるな」と
申されました。〔花の王様の物語 二七頁〕



船の嫁入り (金の船)
作曲 萱間三平
作歌 野口雨情

今夜は船の嫁入りだ
船に長持
貸してやれ
尻の裏の篠藪に
船が提灯
点けてゐた
尻の裏の篠藪は
霜枯れ篠藪
おー寒い
今夜は船の嫁入りだ
船に駒下駄
貸してやれ

(二頁「船の嫁入り」より)



① ② ③ ④ | ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ | ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ | ⑬ ⑭ |
一 こ ん や は い た ち の よ め い り だ
二 ウ マ ヤ ノ ウ シ ロ ノ シ ノ ヤ ブ ニ
三 う ま や の う し ろ の し の や ぶ は
四 コ シ ヤ ハ イ タ チ ノ コ メ イ リ ガ



① ② ③ ④ | ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ | ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ | ⑬ ⑭ ||
い た ち に な が も ち か し て や れ
イ タ チ ガ チ ャ ウ チ ン ツ ケ テ キ タ
し む が れ し の や ぶ お ー さ む い
イ タ チ ニ コ マ ゲ タ カ レ テ ヤ レ

鼯の嫁入り

野口雨情

今夜は鼯の嫁入りだ

鼯に長持

貸してやれ

厩の裏の篠藪に

鼯が提灯

点けてゐた

厩の裏の篠藪は

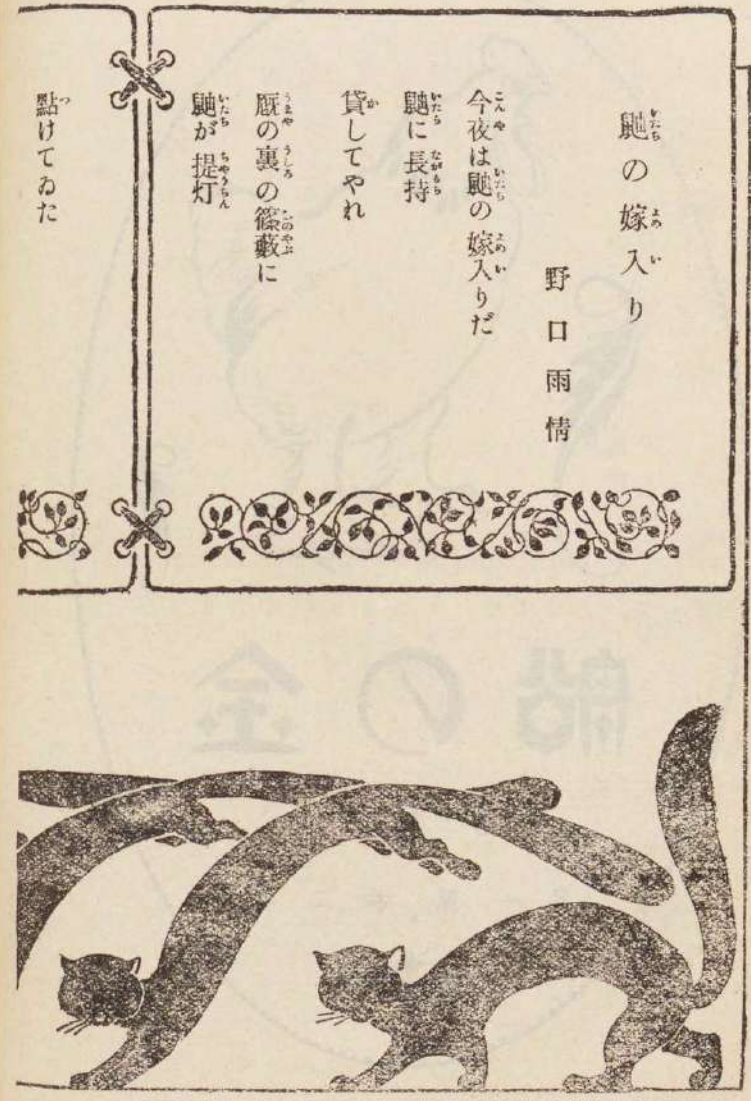
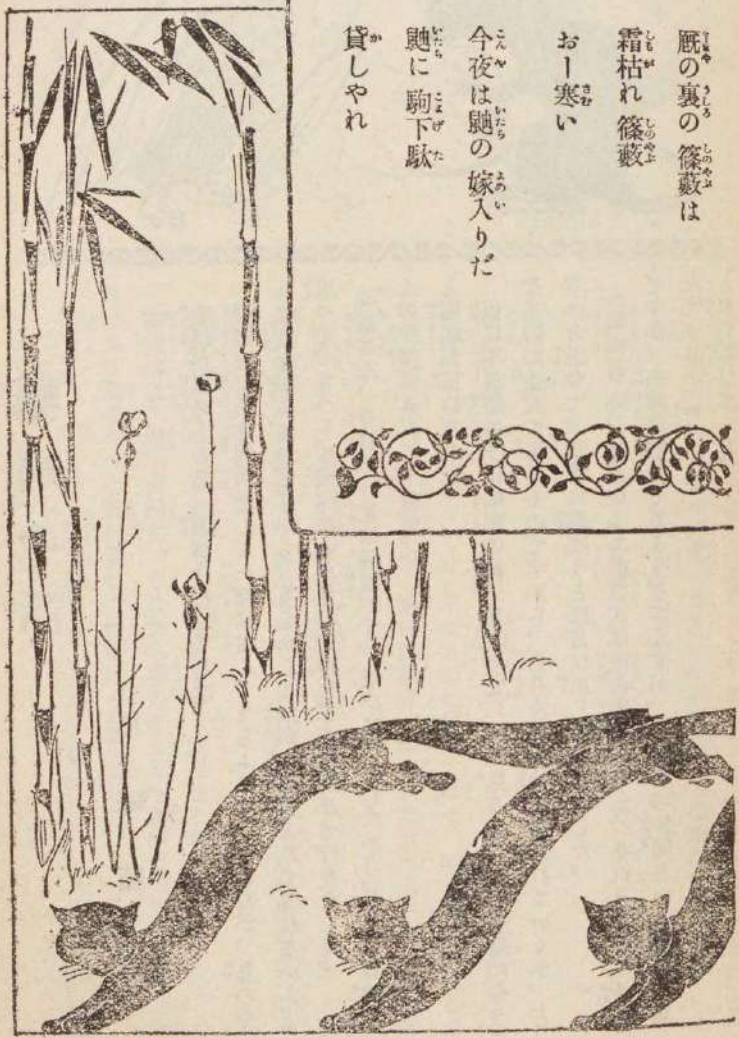
霜枯れ篠藪

おー寒い

今夜は鼯の嫁入りだ

鼯に駒下駄

貸しやれ



蝙蝠の話

島崎藤村



蝙蝠が鼠のところへ遊びに行きました。
蝙蝠は鼠の仲間入をして一緒に遊んでもらふつもりでしたが、鳥のやうに空を飛ぶものだから、もしかして鼠が仲間に入れて呉れないかと思つて、ちつとも飛べないやうな顔付をして出掛けて行きました。
『鼠さん、今日は。私は蝙蝠です。遊びに来ましたから、どうかお前さんの仲間に入れて下さい。』
と蝙蝠が言ひました。

鼠は不思議さうに蝙蝠の様子を眺めました。見ると、鳥の羽翅のやうなものが生えて居るものだから、自分たちの仲間に入れていゝか、どうかと思つて、直ぐに遊ぼうとは言ひ出させませんでした。

『蝙蝠さん、さういふお前さんは獣の仲間ですか、それとも鳥の仲間ですか。一緒に遊んでもようござんすが、私たちの仲間といふ證據を見せて下さい。』
と鼠が言ひました。

そこで蝙蝠の言ふには、『私の聲を聞いて下されば分ります。私はお前さんの鳴くやうに鳴いて見せます。それが何よりの證據です。』

『そんなら鳴いて見せて下さい。』
と鼠が言ふものだから、蝙蝠は丁度鼠のやうな聲を出して、

『チ、チ、チ、チ、チ。』
と鳴いて見せました。

鼠はそれを聞いて、すつかり安心しました。そんなら一緒に遊びませうと思つて、それからいろいろ／＼なものを持つて来て、蝙蝠に御馳走しました。お芋だの、人参だの、鱈の頭だの、蝙蝠には食べられないほどの御馳走をしました。

『蝙蝠さん、このお芋は私が臺所から擔いで来たものです。この人参も私が臺所から背負つて来たものです。この鱈の頭は私が屋根裏に貯へて置いたものです。』

鼠はそんなことを言つて、蝙蝠をよるこばせました。
蝙蝠は鼠と遊んだ後で、それから雀のところへ遊びに行きました。今度はさも鳥のやうな顔付をして出掛けて行きました。

『雀さん、今日は。私は蝙蝠です。遊びに来ましたから、どうかお前さんの仲間に入れて下さい。』





つて来て、蝙蝠に御馳走しました。
蝙蝠はたいへん鼻を高くしました。自分は附合が廣い。雀も自分のお友達なら、鼠も自分のお友達だ。さう思つて自慢をしながら、もう一度鼠のところへ出掛けて行きました。さうしますと、鼠が言ふには、
『蝙蝠さん、お前さんはこないだ雀のところへ行つて、鳥のやうに飛んで見せたさうだ。お前さんは私たちの仲間ではないから、鳥の方へ行つても遊びなせう。』
と断りました。
蝙蝠は鼠に断られてしまつたものですから、仕方なしに雀の方へ行つて遊ばうと思ひまして、もう一度雀のところへ出掛けて行きました。さうしましたら、雀からも断られてしまひました。
『蝙蝠さん、お前さんはこないだ鼠のところへ行つて、鳴いたさうだ。お前さんは、私たちの仲間ではないから、鼠の方へ行つても遊びなさい。』
—— チユウ、チユウ。』
と雀が鳴いて、何處かへ飛んで行きました。
蝙蝠は彼方へ行けば獸のやうな顔をし、是方へ来れば鳥のやうな顔をしました。そのために、鼠からも仲間はずれにされ、雀からも仲間はずれにされてしまひました。(おはり)



と蝙蝠が言ひました。
雀は鼠よりも驚いて蝙蝠の様子を見ますと、身體には獸のやうな毛が生えて居ます。趾は短くて、おまけに釣爪のやうなものが生えて居て、その釣爪を木の枝にでも掛ければ、丁度やらんこでもして遊べるやうな不思議な道具まで持つて居ます。それはかりでなく、口はどうしても獸の口で、鳥の嘴とは見えません。自分たちの仲間には、こんな鳥があるだらうかと思つて、雀は容易に蝙蝠と遊ばうとは言ひませんでした。
『蝙蝠さん、さういふお前さんは鳥の仲間ですか、それとも獸の仲間ですか。一緒に遊んでもよろごんですが、私たちの仲間といふ證據を見せて下さい。』
と雀が言ひました。
そこで今度は蝙蝠の言ふには、『私はお前さんたちの仲間です。獸といふ獸はみんな地べたを這ふもので、お前さんのやうに飛べるものは有りません。一つ私の飛ぶところを見て下さい。私はお前さんの飛ぶやうに飛んで見せます。それが何よりの證據です。』
『そんなら飛んで見せて下さい。』
と雀が言ふものですから、蝙蝠は丁度雀の飛ぶやうに飛んで見せました。雀は喜んで、鼠が御馳走したよりはもつと上御馳走、お前の顔などを待



いつものやうに鐵砲肩けて山を奥へ奥へと入つて行きましたが、どうしたものか、其日に限つて兎一疋にも出會ひませんでした。で、仕様事なしに山の頂から、ズツと東の方を眺めて居ますと、遙か向ふから蛇々とした細い川を筏の流れて来るのが見えました。奥兵衛は考へました。

「あの筏が丁度此山の麓まで流れて来る間に、俺は此所から川端まで降りて行かれる。そして俺は彼の筏に乗つて家へ歸らう。さうぢや、夫れが宜い。」

奥兵衛はまた鐵砲を肩にして、山の頂から眞直に川の方へ樹の枝に攫まりながら、蔓に縋りながら、大急ぎに急いで降りて來ました。そして川岸から三十間ばかり上の方まで來た時、右手の岩の上の大きな樫の枝が、ザワ／＼と動くのが逸早く奥兵衛の眼に映りました。

奥兵衛は鐵砲を取直して、窺と木の枝の間から覗いて見ますと、其の樫の樹の上に大きな猿が二疋頼りに枝を揺ぶりながら樫の實を取つて居るぢやありませんか。奥兵衛は筏の事も何も打忘れてしまつて、忍び足に其の樫の樹に近寄つて行きました。所が驚くぢやあ



山さち川さち

沖野岩三郎

紀州の山奥に、奥兵衛といふ正直な獵夫がありました。或日の事、



りませんか、樫の樹の枝には大猿が二疋だと思つたのが、なか／＼二疋や三疋ちやありませんでした。小さい可愛い猿が、五疋七疋十疋とビョン／＼と枝から枝へ、跳びあるいて遊んで居るのです。て、與兵衛は其中の一番大きい親猿を射つてやらうと思つて、狙ひを定めて、ドーン！と一發射りました。

「しめた！」と與兵衛は叫びました。夫れは與兵衛の長い間の経験から、鐵砲の音で、其の彈丸が的中つたか、的中らなかつたかが直ぐに知られたからであります。

與兵衛は直が新しく彈丸を込めて樹の上を見ました。もう其時は皆な五疋十疋の猿が幹を傳つて一生懸命に跳び降りて、何所とも知れず逃げて了つた後でした。

「はてな、今の彈丸は確かに命中つた筈だが……」と獨語を言ひながら、與兵衛は樫の大木に近づきました。すると大きな猿が一疋、右の手で枝を掴んで、ぶらりとぶら下つてゐました。與兵衛は直ぐまた一發夫れを射りました。其の彈丸は猿の右の手をうつたのでした。所が猿は、はたりと下へ落ちて來ましたが、今度は左の手でまた



別の枝を握つて、ぶらりとぶら下りました。與兵衛は少し氣味悪く思ひましたが、勇氣を出して三發目を射ちますと、とう／＼頭の後の方を射ち抜いたので、ドスン！と音がして、與兵衛の立つてゐた二間ばかり上へ大きな親猿が、血に塗れて落ちて來たのでした。

與兵衛は早速駆け上つて行つて其の親猿の手をグツと掴んで下へ三尺ばかり引摺りますと、山の上の方から土瓶の周圍程の大きな石が、ゴロ／＼と轉がつて來ました。

與兵衛は驚いて飛び退きながら見ますと、最前山の中へ逃げ込んだ親猿小猿が、十四五間上の處へ出て來て、與兵衛に其の射殺された猿の死骸を渡すまいとして、石を轉がしたのであります。夫れと知るや與兵衛は、腰に結んで居た細引で、射取つた猿を藤と縛つて川岸の方へ引摺り下しました。

すると山の中から五疋も十疋も、親猿子猿が、キヤ／＼キヤ／＼と叫びながら、其の屍骸を奪ひ返さうとして、追かけて來るのでした。與兵衛は顔色を變へて一生懸命に川岸へ走り降りました。けれども其の猿を縛つた繩は、堅く右の手に握つてゐました。



い五本の指を堅く握つてゐるのです。
與兵衛は仕方なしに、親猿と一緒に其の子猿を家に擔ぎ込みました。そして家内中で其の子猿を引張つて見たり、煙草の煙で燻べて見たりしましたが、どうしても離れないのです。で、とうとう母猿を水の中へツツリと浸けますと、漸と小猿は母の腹から離れました。
「なア、畜生でも可哀さうなものぢや。」と與兵衛が言ひますと、
「本當にネ、死んだ親ぢやと知らずに、其の乳首に纏つてゐたのがイヂらしい……」とお熊といふ娘は、涙ぐみながら言ひました。
「なア可哀さうに、お前の母アさんは死んだのぢや、もう乳は出ないんぢやよ、なア可哀さうに。」と言つて、今年六つになる信次といふ與兵衛の孫は、其の子猿の頭を撫でながら泣きました。
母猿を最前からちつと見詰めてゐた與兵衛の眼からは、玉のやうな涙がポトリポトリと落ちました。そして言ひました。
「俺は、今日限り、獵夫は止める。もう一生鐵砲は射たない。信次お前は其の子猿を大事に飼つてやれ。俺は此の母猿を裏の墓場へ可憐に葬式をしてやる！」(つづく)



112
與兵衛は轉びながら川岸へ迂り降りた時、丁度川上から筏が流れて來ましたので、早速其筏に飛乗りました。そして親猿の死骸も、引寄せて筏の上に載せたのです。筏を流して來た筏師は驚き呆れて此の有様を見てゐましたが、早い流れてしたから瞬く間に筏は五六十間も下の方へ流れてしまひました。川岸の岩の上で、親猿小猿はギヤア／＼言つて下の方を眺めてゐました。
與兵衛は筏の上にドツカと座つて、先づ川の水を一口がぶりと兩手に掬つて飲みました。夫れから氣を落つけて射取つた大猿を能く／＼見ますと、大猿の懐には可愛い／＼小猿の赤ちやんが、ピツタリと頭を母猿の乳頭の所に押付けて、四つの手で、しつかと母の腹にシガミついて居るのでした。
「ぢや！一疋だと思つたら二疋だ！」
與兵衛は眼を圓くして驚きました。筏師共は「夫れは思ひも設けぬ事だ！」と言つて笑ひ興じました。
所が與兵衛は其の子猿を母猿から引離さうとしましたのが、どうしても離れません。カッチリと四つの手で母の腹に取纏つて、其の小



正夫さんと犬の子

有島生馬

正夫さんは七疋の子をどうかして早くお土蔵の床下から、もつといゝ處へ出してやり度いと思ひましたが、お父様はなか／＼お許しになりませんでした。子供を生んだ時には親犬の気が大變荒くなつてゐるから、もしうっかり近づいたり、子犬にははつてゐる處でも見られると、気がちが

つたやうになつて、人に噛み付いたり、子犬を益隠したりするものだから、うっかりした事は出来ないよと、お父様はおつしやいました。で正夫さんは一週間許りは時々上げ板を上げて、親犬のゐない時分を見計らひ、水やごぜんを親犬のために入れてやつたり、一つづゝ小犬を引張り出して

牛乳を指先さにつけて、無理に飲ませる位な處で我慢してゐました。

處が一週間もすると、親犬の散歩や用途しに出る度数が多くなつて、その上留守の時間も段々長くなつて來ました。その頃或る犬の好きなよその小父さんが來て子犬をみて、こんなに澤山な子犬に乳を飲ませて置いては、親犬も弱るし、子犬も皆な丈夫には育たない。どれもこれも乳が足りないから、よた／＼した弱い犬にしかなれない。早く半分位、三疋か四疋に減じてやらなければ駄目だ。それには一度に二疋も三疋も取上げると親犬が直ぐ氣付くから、一日か二日に一疋位づゝ減じて行けば、犬には數をかぞへる智慧も、それを覺えて行く能力もないのだから、氣が付かずに安心して、残つた小犬を丈夫に育てるものと教へて下さいました。

正夫さんはお父様がお歸りになつた時、その事を申し上げました。お父様も成るほどさうだとおつしやつて、正夫さんと一緒にお藏前に行つて、床下から犬を一つ一つ、代りばんこに出してごらんになりました。一番初めに正夫さんが取出したのは赤白の斑、次が黒、次が白、次が黒の斑が二疋、次が栗色の狸のやうなの、次が栗色と白との斑、かう一々毛色が變つてゐるやうに、形や、目の色や、尾や耳の長さも一々變つてゐて、どれも可愛いのです。

「正夫、これが弱そだから、これを捨てようか。」
さうお父様がおつしやると
「お父様それはいけませんよ、僕が好きなんだから。」と正夫さんが云ひます。
「これにませう。」
と正夫さんが云ふと、今度はお父様が

「それは中々いゝ犬だよ、捨てるのは可哀相だ。」

とお止めになります。さう云ふ風に云つてゐると、どれ一つ捨てゝいゝ犬といふのはありません。皆なくくん云つて、葡萄のやうな眼を開いて、脊中を丸め、脚をちぢこめて、舌で手をなめます。

「折角生れて来たんだからもう少し大きくなるまで育てゝやらう。捨てゝも、もしゝ人が捨てゝ呉れゝばいゝが、車や電車にでもひき殺されてもしたら、本統



一六
に可哀相だからね……もう捨てる事は断然止めやう。』
お父様がさうおつしやつたので、正夫さんも直ぐ賛成しました。

二

親犬といふのは畜ひ主のな
い野良犬で、白黒斑の丈の低
い、餘り格好のいゝ犬ではあ
りませんでした。此頃では正
夫さんが上げ板を上げると、
さつさともう尾を巻いて、床
下の暗い方へ逃げて行つて終
ひます。その癖ごぜんを入れ
てやると、直ぐ来て喰べて終
ふ處を見ると、どこかいら

夫さんのすることと、そつと見てゐるに相違ありませんでしたが、野良犬の本性で、いつまでたつても、少しも人には馴れませんでした。だから誰

も亦可愛がつてやる人はありませんでした。
て、或る日、正夫さんは親犬が散歩だか用達しだかに出て、留守になつた時を見計ひ、七疋の子犬を皆な物置小屋に造つた新しい犬小屋の軟い藁の中に入れてやりました。暗い處から急に明るみへ出たので、犬ころはさゆん／＼啼いて、互に重なり合つたり、からみ合つたり、兄弟の脚を乳房と間違へてちう／＼しやぶつたりしました。正夫さんが犬小屋の前をどくと、直ぐどこからか親犬が出て来て、新しいお家で乳を飲せてやりました。親犬は、自分の姿は隠してゐても、ちやんと子犬の事は注意して見守つてゐるものとみえます。その翌日のこと、御用閉きに来た酒屋と魚屋と

八百屋の小僧達が、面白がつて、犬の子を弄つてゐた處へ、親犬がよそから歸つて来て、いつになく怒つて、三人に向ひ白い歯を出して吠え付きました。子僧達は早速子犬をはより出して逃げたので、幸ひ無事でしたが、親犬はそれからその日一日中、犬小屋の脇を離れないで番をしてゐました。子犬を取られやしないかと思つたのでせう。

その又明る朝になつてみると、七疋のうち五疋の子犬が、小屋から消へたやうにゐなくなつて終ひました。正夫さんの心配は一通りではありませぬ。残つたのは白と狸の二疋で、七疋の中で一番弱い腹せた、容易に育ちさうもないの許りでした。親犬もとても七疋は育てられないとあきらめ、一番番飼さうな二疋だけ残して、あとの五疋を連れて行つたのでせう。正夫さんはお蔵の床下やお庭や御近所や、方々尋ねて歩きましたが、どこに行つ

たのかまるで見付らないので、がつかりしてゐました。するとお藏とはまるで反對の御玄關の床下で犬の子の啼くの竹が聞き付けたと云ふので、喜んで正夫さんは行つてみました。なるほど幽かな啼聲がします。確かに五疋が五疋ともそこにゐさうですが、今度はお藏前のやうに上げ板を上げてみる譯に行きません。正夫さんは氣をもみながらも、時々玄關に行つて、床下から閉ゑて来る啼聲だけで、丈夫に育つてゐるんだらうと、唯思つてみる許りでした。

残された白は、履せつこけた然も跋の犬でした。もう一つは栗毛で目の上と鼻の先だけ少し黒いので、正夫さんは直ぐ、それに「狸」と云ふ名をつけて終ひました。狸は小さい癖に意地の悪い犬でした。然も二疋とも牛乳を飲み糞をたので親犬が来



なくとも、日々大きくなつて、小屋の入口からころがり落ちたり、そこらをよたよたと歩いたりする

位置になりました。

或る日、正夫さんが日向で狸の身體に付いてゐる蚤をとつてやつてゐましたら、糞所の縁の下から「ちよこ」と黒の班が出て出ました。

「竹やごらん、そら黒の班が出て来たよ。」
さう正夫さんが大きな聲を出したので、黒の班

は驚いて引込んで終ひました。その代り今度は茶色の班がひよつこり顔を出して、「今日は」といふやうに、正夫さんの顔を見ました。正夫さんが捕へやうとしたら、赤の班も、小さな穴から縁の下へ隠れて終ひました。

「竹や、それはね二疋とも大きくなつてゐたよ。白や狸のやうに瘦せてはゐないよ。」

正夫さんは捕へられなかつたのがさも残念さうに竹に話をしました。

その晩可哀相な事が起りました。明る朝竹が便所のお掃除をしに行くと、中で犬の啼聲がします。それは黒でした。竹は驚いて外を廻つてやつと黒を出してやりました。さうして水で綺麗に身體を洗つてやりましたが、茶色の班と黒の班の二疋はそこで憐れにも溺れ死んで終ひました。遊びに外

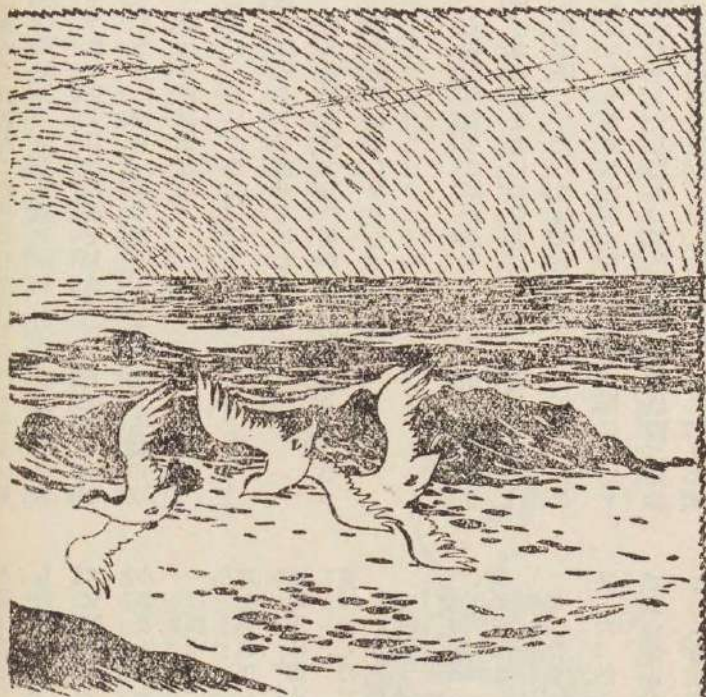
へ出ようとして、道を間違へ、ついそんな中へ落ちたのでせう。竹と小使爺やの二人が、三疋の小犬を埋めたお畑の隅に、正夫さんは石を積んで、小さなお墓を立て、やりました。さうして直ぐ爺やに頼んで、お玄關の床下に残つてゐたあとの三疋を連れ出して、犬小屋に入れ、もうどこからも縁の下に這入れないやうに、方々の穴をふさいで貰ひました。

子犬が段々大きくなつたので、親犬はもう安心したとみえ、犬小屋の中で、五疋の子犬に乳をやつて育てました。

子犬は益々大きくなり、よく正夫さんにぢやれました。然も親犬丈けはいつまでも人になれないで正夫さんや、竹の姿が見えると、こそ〜とどこかへ逃げて行つて終ひました。(をほり)



めでたや、めでたや、
 おめでたや、
 お日様、お日様、
 若いお日様、
 今日（けふ）はあなたの鹿島立（かしまだて）、
 金（かね）のお船（ふね）に積み餘（あま）る
 熱（あつ）と光（ひかり）は世（よ）を温（ぬく）め、
 眞紅（まゝ）の帆（ほ）から洩（あ）る風（かぜ）は
 長閑（のどか）な春（はる）を地（ち）に瀟（あ）たし、
 そして行手（ゆきで）は花盛（はなざか）り
 めでたや、めでたや、
 おめでたや、



太陽（たいやう）の船出（ふねだ）

與謝野晶子（よせのあきこ）

お日様、お日様、
 若いお日様、
 今日（けふ）はあなたの鹿島立（かしまだて）、
 正月元日（しょうげつげんじつ）、瑠璃色（るりいろ）の
 海（うみ）になびいた霞幕（かすみまく）、
 その紫（むらさき）をすと分（わ）けて、
 金（かね）のお船（ふね）に、玉（たま）の權（ごん）、
 東（あづま）の空（そら）に帆（ほ）を揚（あ）げる



花の咲かぬ國

坪井美都子

昔ある國にエデル姫といふ美しい姫様があら
りました。エデル姫のお父様は、雪ばかり降つて
ゐる山國の王様でした。王様もエデル姫も、大そ
うなさけ深い方でしたから、國中の人達が、お二
人の徳をお慕ひ申してをりました。

この國には、湖水や、森や、山があつて、繪の
やうに美しい國でした。ところが、惜しい事には
年中雪ばかり降つてゐるので、花らしい花は、一
つも咲きませんでした。エデル姫は、この事を大
そう嘆いて、「どうかして、この國に花を咲かせた

いものだ」と、何時もくその事ばかり思つてゐ
らつしやいました。

「鳩さんあなたは何處から、こんなきれいなお
花を持つてゐらつしたの」

エデル姫は、ある日の事、大勢の鷹もとを連れ
て、雪あがりの山の麓を、散歩してゐらしつやい
ました。すると、一羽の眞白な鳩がとんで来てすぐ

「ハイ、私は海を渡り、山を越えて「鳩の國」から
遙々と、お姫様にこの花を差上げに参りました。
お姫さまが、大層美しく、徳の高いお方である
事を私の王様がお聞きになりました、是非お姫様
にほしいと仰ります。それで、私がそのお使に参
つたのでございます」鳩はかう言つて、持つて來
た赤い花をエデル姫に差し上げました。



お姫様の前
へ、下て來
ました。鳩
は赤い喙
に一輪の眞
赤な花をく
はへてをり
ました。

と、其處へ何處からか、一羽の鳥がとんで來ま
した。喙には、黒い花をくはへてゐました。鳥は
ずか／＼とエデル姫の前へ来て、申しました。
「私は山を越え、谷を越えて、遠い／＼「鳥の國」か
ら参りました。私の主人は、その國の王様でござい
ます。お姫様が、大層美しく、徳の高いお方である

それは見た事もない程美しい花でしたから、エ
デル姫は鳩に尋ねました。

二

事を傳へ聞きまして、是非お妃にほしいと仰いますので、私がお使に参つたのでございます。お土産のお印まで花を一輪持つて参りました。かういつて、烏は黒い花をエデル姫に上げました。エデル姫は、鳩と烏のおくり物を、兩手に持ちながら、

「鳩さんも、烏さんも、おことに御苦勞でした。しかし、私には一つのお願ひがございます。」と申しました。

「そのお願とは、どんな事でございますか。」鳩と烏が一しよに尋ねました。

「外でもございませぬ。知つての通り、この國には花が一つも咲きませぬ。それ故、淋しくて、淋しくて、ならないのです。どうぞこの國へ、美しい花が咲くやうにして下さいまし。私は花を咲かせて下さつた方へまら、何時でもお嫁に参ります。」

へ行くと、私の臣下は豪勢なものだ。と測りて、自慢をしながら、自分の臣下をつかはしました。ところが、やつぱり雪の女神になやまされて、植ゑた花は、みんな枯らされてしまひました。

そこで、今度は「鳩の國」の王様が、バラの女神の所へ行つて、花を咲かせる工夫をお頼みになりました。すると、バラの女神が、

「あなたのお頼み故聞き入れて上げたいのは山々ですが、このお頼みだけは、私の力に及びませぬ。あの意地の悪い雪の女神がエデル姫の美しいのをねたんで、わざと花の咲かぬやう、雪ばかり降らしてゐるのですか



と、エデル姫が申しました。

そこで、鳩と烏は、お互に少しも早く、この事を自分の王様に告げたいと思つて、大急ぎで、とんで歸りました。

二

「鳩の國」の王様は、大そう穏やかな、立派な王様でした。ところが、「烏の國」の王様は色の眞黒なこわい王様でした。「鳩の國」の王様と、「烏の國」の王様はお互に「どうかして、エデル姫のお國へ花を咲かせたいものだ」と思つて、いろ／＼と考へました。鳩の王様はすぐ様御自分の臣下にいひつけて、エデル姫のお國へ花を植ゑさせました。ところが、みんな雪の女神のために枯らされてしまひました。これを知つた「烏の國」の王様は「鳩の國」の臣下は弱いはかりで、役に立たない。其處

らにと仰いました。このお話を聞いて、「鳩の國」の王様は大層お力を落されました。

「烏の國」の王様も、同じことを、百合の女神の處へ行つて、お頼みになりました。すると百合の女神も同じやうな事を仰

つたので、烏の王様は大そうお怒りになりました。

「雪の女神などに負けてなるものか。エデル姫をきつとくこの國へ連れて来て見せる。」

氣の強い「烏の國」の王様は怒ながら申されました

三

エデル姫は、その後も毎日々々、山の麓を散歩し

てお居てになりました。すると、其處へこの間の鳥がとんで来て

「エデル姫さま、エデル姫さま、」と呼びました。

「あや、鳥さんでしたか、私の國に花の咲く工夫が出来ましたか。」とエデル姫がお尋になりました。

「出来る事は出来ませんが、それにはお姫様が、まづ私と一しよに、私の國へお出でにならなければなりません。」と鳥がいひました。

「え〜お前さんと一しよに行く事は出来ません。私のお母様が、お亡くなりになる前に、お前は、この國に、花の咲かぬ内は何處へも行くな。行けばお前の命がなくなる」と仰いました。ですから、私をつれて行く前に、どうぞ花を咲かせて下さい。」と、エデル姫がまたお頼みになりました。

この様に、鳥がエデル姫とお話をした間に、鳥は主人の王様のいひつけて、花の王様の處へ

そこへ花の王様が着きになりました。花の王様は雪の中に倒れてゐるエデル姫のお姿を眺めてがっかりしてゐらつしやいました。その内に、葦の女神や、バラの女神や、百合の女神が集つて参りました。雪はしきりと降り積りました

そして、間もなく、エデル姫の亡骸を埋めてしまひました。神様たちは、雪の中に立つて、

いろ〜と御相談

なさいましたが、エデル姫を大層あはれに御思召して、そこへ、白バラの香と、百合の色と、葦の姿をした花をお造りになりました。そして、花の王様は、その花に向つて、



「雪の中でも咲く様な花よ咲け、谷も凍らず、夏もしほれず、この國の誇となるやう花よ咲け。」と申されました。

すると、真白な、それは〜香のよい花が一輪、

エデル姫を埋めた雪の下から咲きました。そこで、神様達は、エデル姫の名をとつて、この花に「エデルウエルス」といふ名をおつけになりました。

この時から、雪の中をいとはずに咲く花が出来ました。そして、この「エデルウエルス」は今も尚、雪の降り積つたスイツツルの山の中に、美しく咲きほこつてゐるといふ事です。(をばり)



神隠しの話

灰野庄平

月のいい晩でした。七八人の子供が集つてくるな
一とかたまりの影になつて、鉦鼓を叩いて行きま
す。その音が遠くまで悲しうに、

ちろりろりん……………

ちろりろりん……………

とひびきます。路の遠い先が小高い丘になつて紅
い灯がたつた二つぼつりといつて居ります。子供

達はだまつて鉦鼓を叩いて、そろそろその丘へ
のぼつて行きました。丘へのぼつてしまつて、ま
つくりな一かたまりになつて居た影が見えなくな
ると、鉦鼓の音も聞えなくなりました。

ちようど此月のいい晩から七日前に當ります。

此の子供達の中で、いつとうふとなしい、いつと
う可愛らしいお嬢さんが、此丘のお宮へお詣り來

ましたが、それつきり歸りませんので、さあちやう
ちでは大變な騒ぎになつて、村中の人が二日二晩
探し廻りましたが、たうとう何處へ行つたのか分
らなくなつてしまひました。そのお嬢さんの名は、
道子さんと云ふのでしたが、道子さんは神隠しに
遭つたのだ、此の丘の神様が、道子さんのあんな
りふとなしいのと、可愛らしいのを、愛くるしく
思召になつて、そつとお隠しになつたにちがひな
いと、村中の人がきめてしまひました。

道子さんのお父さんは、中々考ふかい方で、
道子さんが見えなくなりましてから、何か考へて
ばかりいらつしやいましたが、七日目の朝になり
ますと、道子さんのお友達に、集まつて貰ふ様に、
お使を出しました。お友達が道子さんのうちへ
集まりますと、お父さんは、みんなに向ひまして
「さあ、皆さん道子が見えなくなりましてから、

今日で、ちやうど七日になります。私は道子にあ
ひ度くつてたまりません、皆さんも、道子と毎日
一所に遊んで下すつたから、さぞ、道子にあひ度
いでしよう。皆さんの中で、ほんとに道子にあひ
度い方は、今晚お月様が出ましたら、お家にある
お佛壇の鉦鼓を持つて、私の家へも一度集まつて
下さい。それから揃つて、丘の神様へお詣りして
下さい。皆さんの中で、ほんとに道子にあひ度い
と思ふ方が、道子さんをかへして下さいと一心に
お祈りしたら、神様はきつと、道子をかへして下
さいます。」

と、涙ぐんでお頼みになりました。それで、道子
さんのお友達のうちでも一とう仲よしが七八人
今、神様の丘へのぼつて行つたのです。

丘をのぼつてしまひますと、樹がこんもりと茂
つて居りますので、苔の生えた地べたへお月さま

の光がちらちらと見えるだけで、まつくらで、しんとして居ますので、みんな何だか、怖くなつて来ました。でも道子さんにあひ度いなあと思ふ心もちがあるもんですから、みんな、くつつきあつて、燈明の見える社の前まで行つて、其處へ坐つて鉦鼓を鳴しました。鉦鼓を鳴らして居ますと、何時の間にか、怖くなくなつて來まして、みんな、道子さんのことを思ふ様になりました。それで、神様に向つて、「道子さんをかへして下さい、道子さんをかへして下さい」と心の中で祈りながら鉦鼓を鳴らしました。静かな社の森の中で、

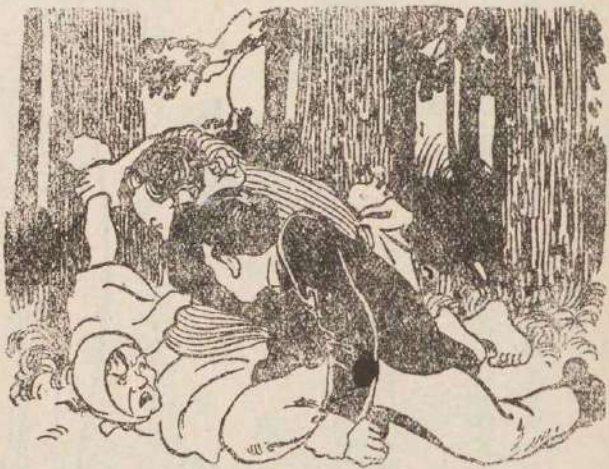
ちろりろりん……

ちろりろりん……

と鉦鼓が寂しく鳴りました。すると、社の狐格子が、そをつと開きました。中の燈明が、ちろりと燃れたと思ふと、真白い着物を着たものが、する

の男が、あぐらをかいて居ます。その男は手をうしろへ廻されて、縛られて居ました。

此の恐い顔の男は人さらひだつたさうです。此の男が、道子さんをさらつて、行つたのださうで、道子さんを隠してあつた場所も云つてしまつたさうです。今夜も子供をさらつて行かうとしたのですが、道子さんのお父さんの智慧に負けたのです。道子さんのお父さんが、此の人さらひの男の出て來る様に、みんなの子供に鉦鼓を鳴らしてお詣をし貰つたのです。人さらひの男は鉦鼓の音を聞いて又子供をさらはうと思つ



は、だあれも一人では行かなくなりました（おはり）

三〇

りと出て來まして、一番先に居た子供の手をつかみさうにしました。その時、森の中がざわざわと動いて、まつくろな影が一つ二つ三つ四つ……むくむくと動いて、どしどしと云ふ恐ろしい足音が聞えるので、みんなはもう、ひやつとすると、何が何やら分らなくなつて、小さくなつて、地へたへたばかりついでにしまひました。恐しい足音が彼方へ行つたり、此方へ行つたり。お宮の縁がざしぎし鳴つたりしました。すこし経ちますと、其邊が明るくなつて、聞き慣れた懐かしい大人の聲が聞えますので、恐々ながら顔をあげて見ますと、めいめいの前に、めいめいのお父さんが、にこにこして立つて居ました。裸の燈燭が、彼方にも此方にも立つて、ちろちろと火が動いて居ります。お宮の格子の前には、道子さんのお父さんが立つて居ました。その前に白い直垂をひつかけた恐い顔

て、お宮のうしろへあけてあつた穴から、そつと入つて待つて居たのです。ところが、道子さんのお父さんは、みんなのお父さんに頼んで、森に隠れて居て貰つたのですから、ちやうど、狐がわなにかゝつた様なものです。

子供達は喜んで、鉦鼓を鳴して歸つて來ました。その後から、人さらひの男を真中にして、みんなのお父さん達が笑ひながら歸つて來ました。道子さんもお家へ歸つてお友達と遊ぶやうになりました。もうお宮の様に寂しい處へ

三一



菜の花と小娘

志賀直哉

或る晴れた静かな春の日の午后でした。一人の小娘が山で枯枝を拾つて居ました。やがて、夕日が新緑の薄い木の葉を透して赤々と見られる頃、小娘は集めた小枝を小さい草原に持ち出して、其所で自分の脊負つて来た荒い目籠に詰め始めました。

「えい？」小娘は思はず左う云つて、起つて其邊を見廻しました。が、其所には誰の姿も、見えません。

「誰れ？私を呼ぶの？」小娘はもう一度大きい聲でかう云つて見ましたが、矢張り答へる者はありませんでした。

二三次そんな気がして、初めて気がつくくと、それは雜草の中から只一本、僅かに首を差出して

居た憐れな小さい菜の花でした。

小娘は頭に被つて居た手拭を去つて、顔の汗を拭き、近寄つて行きました。

「お前、こんな所で、よく淋しくなつたね」

「淋しいわ」と菜の花は親しげに答へました。

「そんなら何故来たのさ」

小娘は叱りでもするやうな調子で云ひました。すると、菜の花は

「雲雀の胸毛に着いて来た種が此所で零れたのよ。困るわ」

と悲しげに答へました。そして、どうか私をお仲間の多い麓の村へ連れて行つて下さいと頼みました。



小娘は可哀想に思ひました。小娘は菜の花の願ひを叶へてやらうと考へました。そして靜にそれを根から抜くと、自分の荷物に脊負ひ、それを片手に持つて、山路を村の方へと下つて行きました。

清い小さな流れが、水音をたて、其路に添うて流れて居ました。

「あなたの手は随分ぼてるのね」暫くすると、手の菜の花は不意にこんな事を云ひ出しました。「あつい手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ、真直にして居られなくなるわ」

左う云ひながら、菜の花はうなだれた首を小娘の

歩調に合はせて、力なく振つて居ました。

小娘は一寸當惑しました。そして心配さうに「苦しいの？」と下を向いて了つた菜の花を、覗き込んで云ひました。

「そんなでもないの、いゝの。心配なさらないでも」菜の花は苦しいのを我慢して答へました。

小娘には圖らず、いゝ考へが浮びました。

「さーさー」と小娘は云ひました。左うして身軽く路端に蹲むと、其儘黙つて菜の花の根を流れへ浸してやりました。

「まあ！」菜の花も生き返つたやうな元気な聲を出して小娘を見上げました。すると、小娘は宣告するやうに、

「此儘流れて行くのよ」と云ひました。

菜の花は不安さうに首を振りました。

「先に流れて了ふと思ひわ」

で行つて了ひました。

菜の花は不圖小娘の鼻の頭にポツ／＼と玉のやうな汗が浮び出して居るのに氣がつきました。

「今度はあなたが苦しいわ」と菜の花は心配さうに云ひました。

が、小娘は却つて、

「心配しなくてもいゝのよ」と不愛想に答へました。

菜の花は、叱られたのかと思つて、黙つて了ひました。

間もなく小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花は流れに波打つて居る髪の毛のやうな水草に、根をからまれて、さも苦し氣に首を振つて居ました。



「大丈夫。心配しなくてもいゝの」左う云ひながら、早くも小娘は流れの表面で、持つて居た菜の花を離して了ひました。

「恐いわ、恐いわ」と流れの水にさらはれながら、菜の花は見る／＼小娘から遠くなるのを心配さうに叫びました。が、小娘は黙つて立ち上ると、両手を後へ廻し、脊で跳る目籠をあさへ、馳けて來ました。

菜の花は安心しました。そして、さも嬉しさうに水面から小娘を見上げて、何かと話しかけるのでした。

何所からともなく氣軽な黄蝶が花の香を嗅ぎつけて飛んで來ました。そして、うるさく菜の花の上をついて飛んで來ました。菜の花はそれを大變嬉しがつて居ました。然し黄蝶は性急で、移り氣でした。そして、いつとはなしに又何所かへ飛ん

「まあ、少し左うしてお休み」小娘は息をはづさせながら、傍の石に腰を下しました。

「こんなものに足をからまれて休むの、氣持が悪
らわ」左う云ひながら、菜の花は尙切りにイヤ〜



をして居ました。

氣を揉ませまいと、わざと菜の花より二三間先を
馳けて行く事にしました。

麓の村が見えて来ました。小娘は振り返らずに、
「もう直ぐよ」と聲を掛けました。

「左う」と後で菜の花が云ひました。
それきり暫く話は絶えました。只流れの水音に
混つて、バタ〜、バタ〜と云ふ小娘の草履で
走る足音が聴えて居ました。

ポチャーンと云ふ水音がしました。と、直ぐ、小
娘は菜の花の死にさうな悲鳴を聴きました。小娘
は驚いて立ちまりました。見ると菜の花は、花も
葉も色が褪めたやうになつて、

「早く〜」と延び上がつて居ます。小娘は急い
で引き上げてやりました。

「どうしたのよ」小娘はその胸に菜の花を抱くや
うにして、後の流れを見廻しながら訊きました。
「あなたの足元から何か飛込んだのよ」菜の花は

三六
「それで、いゝのよ」小娘は汗ばんだ眞赤な顔に
意地悪な、然し親しみのある笑ひを浮べて云まし
た

「いやなの。休むのはいゝけど、かうして居るの
は氣持が悪いの。どうか一寸あげて頂戴、どうか」
「いゝのよ」小娘は笑つて取り合ひません。

が、其内水の勢で菜の花の根は自然に水草から、
すり抜けて行きました。そして、不意に、

「流れるら〜」と大きな聲をして菜の花は又流さ
れて行きました。小娘も急いで立ち上ると、それ
を追つて馳け出しました。

少し来た所で、
「矢張りあなたが苦しいわ」と菜の花はコワ〜
云ひました。

「何でもないの。心配しなくていゝの」今度は小娘
も優しく答へてやりました。左うして、菜の花に

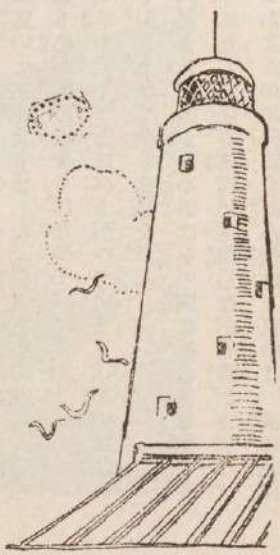
未だ動悸が治まらないやうに言葉を取りました。
「いぼ蛙なのよ。一度もぐつて不意に私の顔の前に
浮び上つたのよ。口の尖つた、意地の悪さうな、
あの河童のやうな顔に、もう少して、頬つべたを
ドスンとぶつける所でしたわ」

それを聴いて小娘は大きな聲をして笑ひました
「笑ひ事ぢやあ、ないわ」と菜の花はうらめしさう
に云ひました。「でもね、私が思はず大きな聲をし
たら、今度は蛙の方で吃驚して、あわてゝもぐつ
て了ひましたわ」かう云つて菜の花も笑ひました。
間もなく村へ着きました。

小娘は早速自分の家の菜の花畑に一緒にそれを植
えてやりました。

其所は山の雑草の中とは異つて土がよく肥えて
居ました。

菜の花はどん〜延び育ちました。
左うして、今は多勢の仲間と仲よく、仕合はせ
に暮らせる身となりました。(をほり)



花がゆれる

松尾孝輔



町から小山を越つても越えて、海の中にずっと突き出た小山の上に、大きな白い燈臺が立つてゐました。其處に、すゞえさんは、お父さんと二人切りで住んでゐました。お母さんはすゞえさんの、幼い時に亡くなりましたので、お友達といつても

お父さんの外には無いのですけれど、そのお父さんも、晝のうちは機械の手入れや、調べ物に忙がしく、夜は夜で暗い沖を通る船のために、大きなラムプに火を燈けて、番をしてゐなければならぬので、ゆつくりすゞえさんには話などして下さる暇はありませんでした。

からつと空の暗れ渡つた日でした。すゞえさんは、日當りのいい燈臺の白壁に倚りかゝつて、ちつと海の方を見てゐましたが、海の底からでも湧き出るやうな物凄いな浪の音をきいてゐますと、急に、

にはゐられなくなりました——

ゆられるゆれる 樹の葉がゆれる
草の葉がゆれる 樹の葉がゆれる

淋しくなつて、泣き出しさうになりました。で、此度は反對に小山の方に向を變へて見ました。遠い海を渡つて和らかい風が吹いて來ました。樹の葉も草葉も皆快よく、音を立て、ゆれましました。見てゐるすゞえさんの心も

明日の朝までゆられる
すゞえさんは、目で見たまゝを其まゝ歌にして、それを勝手な曲節で歌つて見ました。

一緒になつてゆれてゐるやうに思へました。自分の聲までが獨りてにゆれ出して、たうとう歌はず



すゞえさんが一生懸命に歌つてゐるではありませんか。可愛い、幼ない娘の喉から轉がり出るやう

な美しい歌の聲！

『すうちやん！』

と喜びの聲が口のさきまで出かかったのを、お父さんは無理に壓へるやうにして、切角の歌の邪魔をしないやうに、そつと頭をひつこめました。それにしてもわが耳に吸ひ込まれるやうにして響いて来る可愛い歌の聲！ たうとうお父さんもつり込まれてしまつて、仕事をしながら調子を合せて歌ひ出したのでした。

二

すゑさんは同じ歌を繰り返しく／＼歌つてゐたのですが、今迄四邊は草葉ばかりだと思つてゐたのに、白や黄い花が、それも何しろ湖風の強い海邊のこととして、此處に一、彼方に一つと云つたやうに美しく咲いてゐるのに気がつきました。そしてその花がやはり草の葉と一緒になつて、面白

も一氣に渡つて、やつと目ざす花を折取つたすゑさんは、漸く夢から醒めた様な氣になりました。『まあよかつた。早く此の花を持って歸つて、お父さんに見せて上げねば』



と心の内に考へながら、さてあの橋を渡らうとしましたけれど、今度はどうしても怖くて渡れません。それでもどうかして渡りたい、どうかして、

さうにゆれてゐるではありませんか。すゑさんの歌は、見るまに變つて來ました——

ゆられるゆれる 白い花がゆれる

黄い花がゆれる ゆられるゆれる

明日の朝までゆられる

かうして同じ歌をあれこれと繰返しく／＼歌つてゐる中に、わけても美しく咲いてゐる白い花がすゑさんの目につきました。樹の葉と一緒に、草の葉と一緒にゆれながら、この美しい白い花はすゑさんに『むらつしやい／＼』といつてるやうに見えました。ゆれる度にすゑさんを手招きしてゐるやうに思へて來ました。それでふら／＼と夢のやうに立上つたすゑさんは、其儘この美しい花の方に馳出して行きました。

見ると其花の前には深い谷川が流れてゐて、それに細い丸木の橋がかけてありました。併しそれ

どうかしと思ひあせつてゐる内に、ふとお父さんの姿が見えました。『あ、お父さん！』と云ひも終らぬうちに、足を滑らして、眞つ倒さまに谷川の中に落ちこんでしまひました。

三

歌の聲が急にやんだと思ふと、ばた／＼と馳け出す娘の姿が窓の硝子越しに見えたので、お父さんは、はつと驚ろいて追かけて來ました。すると見るまにすゑさんは川の中に落ちてしまひました。

『しまつた』

と叫びながら氣も狂はんばかりに川邊に走りよつて見ますと、すゑさんは少し川下の方の、水際に覆ひ茂つてゐる樹の枝に引つかかつてゐました『ありがたいな』

と、お父さんは一生懸命やつとのことで、氣を失

つてゐるすゝえさんを助け上げました。呑んだ水を吐せたり、冷えた體を温めたりして種々の手當をつくしたので、すゝえさんはやうやく息を吹きかへしました。そしてそつと目を明けました。

「や、氣がついたね、もう大丈夫だよ」

とお父さんは大喜びに喜んで、すゝえさんを赤ん坊のやうに抱き上げました。併しどうした事かすゝえさんは其儘すや／＼と寝入つてしまひました

「すうちちゃん、すうちちゃん！」

とお父さんは又喫驚して呼び覺まさうとしましたけれどすゝえさんは、如何しても目を明けません。「どうしたと云ふのだらう、切角助かつたと喜んでゐたのに」

とお父さんはもう落膽して、我兒の寝顔を見入つてゐました。併し不思議な事には、すゝえさんは唯眠り續けてゐるが、別段體が感くなるやうに

溜さつた水が何處からともなく湧いて來ました。すゝえさんはそれを一口掬つて飲んで見ました。

「まあ！まるでお乳のやうよ」

と言ひも終らぬうちに、すゝえさんは何だか笑ひ出した位にうれしい氣持になりました。譯もなく嬉しくて／＼堪らなくなりました。

またその水を一口掬つて飲みました。すると今迄嬉しくて堪らなかつた胸の中が一時に破れたかと思ふと、どうでせう。目の前に小さい／＼草の芽が出てゐるではありませんん

か。いつか世界は晝のやうに明るくなつてゐました。見る間にその芽から莖が出ました。葉が出ました。それから薔が出ました。そしてたうとう大



も見えませぬ。それに今一つ不思議な事には、すゝえさんが生命がけて摘取つた白い花は、今も右手に握られてゐて、溜みも枯れもしませんでした。すゝえさんはかうして來る日も／＼眠り續きました

四

すゝえさんは温かいお母さんの懷に抱かれて、安心しきつて寝てゐました。すゝえさんは慥にさう思つてゐました。お母さんの優しい姿が目に見えるやうにも思ひました。冷え切つた體が、少しづつ温まるにつれて、かすかに覺えてゐるお母さんの目や口が見えて來るやうに思ひました。四邊はうす暗く霞んでゐて何も見えませんけれど、自分の姿すら明瞭とは見えませんけれど、すゝえさんはなつかしいお母さんに抱かれてゐるとばかり思つてゐました。幾日も／＼さうした日が續きました。其中に口が大變に開いて來ました。すると

きい白い花が咲いたと思ふと、すゝえさんは長い長い眠りから眼がさめたのでした。

來る日も／＼唯眠り續けてゐるわが兒を、お父

さんは今日も心配さうに看護してゐますと、すゝえさんの右の手に握られたま開いてゐた白い花が急に凋んでしまひました。これはと驚いて見ますと、すゝえさんが目をぱつちりと明けてゐました。

お父さんは氣も狂うばかりに喜んですゝえさんを抱きました。お父さんの目からは嬉しさの涙が流れました。すゝえさんも嬉しくて／＼泣きながら云ひました「お父さん、あたしはね、あしたはね、お母さんの處に行つたのよ。」(おは)

謎

朝見たときは
黒い鴉
羽根を縮めて
寒さうに
灰に埋れて
啼きもせず。
午に覗けば
赤い鴉

西條八十



いつの間にやら
緋の袈裟ころも、
殊勝顔して
お念佛。
夜に探せば
白い鴉
白髪頭の
老いぼれ姿、
やがて崩れて
灰ばかり。

(火鉢の炭)





白い雀

二 松操

昔、ある所に、一羽の白い雀がをりました。毎日、可愛らしい聲で囀りながら、青々とした木の間をとび歩いたり、青空高く昇って行ったりして、大層たのしく暮して居りました。

その頃、天上の國に、元王といふ悪い王様がをりました。この王様は、白い龍の車に乗って、悪

ました。白い雀はまるで矢を射るやに、地上へ落ちて行きました。元王はすぐさま、白い龍の車に乗って、落ちて行く雀をよひかけましたが、とうとうよひつくことができませんでした。

その頃、地上の國に、文王といふ善い王様がをりました。この日、文王は、花園へ出ました。そして、白い雀が青空へ高く〜昇つてゆくのを眺めてゐました。すると突然、そのチュ〜と囀る



聲がやんで、天から白羽の矢のやうなものが飛んで来て傍の藪に落ちました。文王は驚いて馳け寄つて見ました。それは白い雀でした。手にとりあげて見ると雀は右の翼を折げたまゝ、首をグッタリたれてをりました。

「マア、可哀さうに、しかしどうやらまだ助かりさうだ。」と。文王は獨言をいひながら、雀に水をやりました。やがて、雀は生きかへりましたので、元王は雀を籠に入れて、静かに養つてやりました。元王はこの様子を見てゐました。折角白い雀をつかまへやうと思つて、龍車に乗つて、わざ／＼下界へ降りて来たのに、平生から憎く思つてゐる下界の文王が、それをつかまへてしまつたので、大層腹を立てました。そこで、なんとかして、白い雀をとり返したいと考へました。

「さうだ！文王を夜討ちにしてやらう。」と、元王は思はず叫んで、夜の來るのを待ちました。やがて日がくれました。文王は元王が、どんなことをたくらんでゐるか、少しも知らないの

いつものやにう、白い雀の籠を見舞に來ました。見ると、白い雀は何か心配事でもあるやうに、少

見ると、白い雀は何か心配事でもあるやうに、少

しも落ちつかないで、籠の中でバタ／＼してゐました。白い雀は文王の姿を見ると、大層喜んで、『さつきから心配で心配でなりませんでした、あなた様のいいてを待つてをりました。元王が今夜攻めて参ります。さうして、あなた様を殺した上、私をとつて行かうと考へてをります。』と白い雀が告げました。文王はそれを聞いて、びつくりしました。

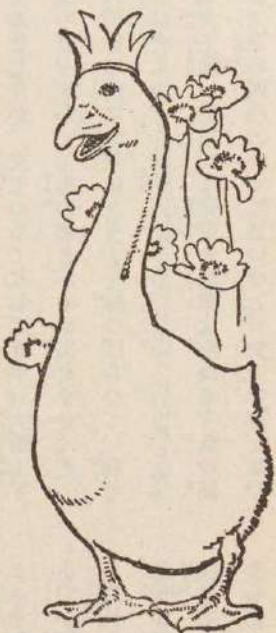
「さあ、どうしたらいいだらう。」と言つて、文王は心配しました。すると、白い雀が言ひました。『元王様、決して心配なさることはございません。このお屋敷のまはりに、篝火と澤山たいいて、監視



てゐましたが、日が暮れるとあか／＼と篝火がたかれるので、どうすることもできませんでした。その翌日、元王は、五色の玉の頸飾りを初め、色色の美しい玉や石や、見るからに眼のさめるやうな錦や綾を、澤山の車につんで、文王を訪ねました。斯うして澤山の贈物をして、白い雀を貰はうと思つたのです。元王は待ち設けられた様に、早速座敷へ通されました。元王がお土産を列べてゐるうちに、澤山御馳走が出て、お酒宴が始まりました。元王は、白い雀のことをいひ出さうと思つてゐましたが、文王のもてなしぶりが、大層上手なので、なか／＼雀のことがいひ出せませんでした。その内に元王はとう／＼酔つぱらつて、寢て了ひました。その時、白い雀が文王にいひました。『文王様、あなたは元王の龍車に乗つて、此の間天上の國へいいて下さいまし。天上の國では、

のやうに明るくありません。元王は明るみでは少しも悪いことが出来ないのでございます。』文王は、白い雀の云ふとほりに、早速家來どもにいひつけ澤山の篝火をたきました。丁度その時一團の白い雲のやうなものが、屋根の上へ下りて來ましたが、篝火で俄に明るくなつたので、天をさして昇つていつてしまひました。此の白い雲は元王でありました。もう一息の處で、灯のためにさまたげられたので、元王は大そう残念がりました。その後、毎晩、元王は文王の家の櫓子とまぐつ

元王が龍暴ばかりするので、早くあなた様のやうな善い王様がいらして、國を治めて下さるのを待つてをります。』と言ひました。そこで、文王は白い雀のいふ通りに、元王の傍になげだされてあつた白羽の鞭をとつて、白い龍の車に乗り、天をさして昇つてゆきました。そして、天上の國をすつかり占領して、その王様となりました。元王はいゝ氣持に一眠して、眼をさました。文王がゐません。自分のもつてゐた白羽の鞭もないので、始めて文王の計略にかゝつた事がわかりました。大層くやしがりましたが、白羽の鞭と白い龍の車とがなければ、元王は天上の國へ歸れないので、やけになつて方々に火事を起したり、暴風や洪水をおこしたりしました。それでも天へ歸ることが出来ないで、とう／＼しまひにはあきらめて山の中へ入つて了ひました。(をほり)



鶯鳥の王様

齋藤 佐次郎

むかし、印度に「月山」といふ高い山がありました。そこは天に一番近い處でしたから、お月様の光までが、みなさんが見るのとは違つてそれはそれはお話しが出来ない程綺麗でした。この山に大昔、黄金色をした不思議な鶯鳥が、澤山に住んでゐました。

鶯鳥には王様が一人ありました。鶯鳥の王様は此處々々お話をしてゐて、その羽毛はまるで「黄金色の湖」といつて、蓮の花が一ぱいに咲いてゐる、大きな湖へ出る事が出来ました。湖水の岸には、美しい草が澤山に生えてゐました。鶯鳥たちは大喜びでした。すぐ様、湖の岸へ下

金の湖」の波を見る様でした。それからまた、鶯鳥の王様は大層賢くありました。ですから、山中の鶯鳥が皆なよく王様の命令に従つて、楽しく暮してをりました。

ところが或る年の冬の事でした。「月山」には毎日雪ばかり降つて、おいしい食物が無くなつてしまひました。そこで、鶯鳥たちはどうかして今年には麓の谷間へ行つて、おいしい食物にありつきたいものだ、その事ばかり思ふ様になりました。ある日のこと、幾つかの鶯鳥は、賢い王様に相



談もしないで、大膽にも麓の谷間の方へどん／＼飛んで行きました。すると程なく、蓮華の湖」といつて、蓮の花が一ぱいに咲いてゐる、大きな湖へ出る事が出来ました。湖水の岸には、美しい草が澤山に生えてゐました。鶯鳥たちは大喜びでした。すぐ様、湖の岸へ下

りて、おいしい草を思ふさま食べました。幸ひ、湖の近くには、こわい人も、敵も、ゐませんでしたから、鶯鳥たちは大層安心して、「こんなにいゝ處は、世界中探したつて無いぞ。」とお互ひにいひました。

やがて日が暮れて來ました。鶯鳥たちはびつくりして、立上りました。「さア／＼もうお山へ歸る時が來た。早く戻つて、みんなに「蓮華の湖」の話をしてやらう」かう叫び乍ら鶯鳥の群は、一整に「月山」をさして、とび立ちました。そしてその日は一同無事に山の洞穴へ着く事が出来ました。

その晩「蓮華の湖」へ行つた連中は、さも自慢さうに、湖水の景色のよい事や、あらしら食物の

澤山にある事などを皆な話しました。行かなかつた連中は、大層羨しがりました。そして、みんな言ひ合した様に、

『私もそこへ連れて行つてくれ。』

『私もそこへ連れて行つてくれ。』

といつて、騒ぎました。すると、昨日湖へ行つた仲間の内に一人、大層考へ深い者がありました。この鷺鳥の名は、スムハといひました。

『皆ながそんなに行きたいと言ふなら、連れて行つてあげるよ。しかし、それは王様に御相談した上でなければいけない。麓の谷間へ行く事は中々あぶない事だからね。みんなも爺さんたちから話に聞いてゐるだらうが、麓の湖にはわれ〜をつかまへて、食べてしまはうと狙つてゐる敵が澤山にゐるんだよ。だから、昨日われ〜が無事に歸つて來られたのは、もつきの幸ひかも知れない。』

前へ進んで來ていひますには、

『王様！ 皆の者は、麓の

「蓮華の湖」へ行きたいといふて、この通り騒いでゐるのでございます。それに就て、私どもは王様に御相談に參りました。』

かういつて、スムハが昨日の事を王様に話しました。

王様はスムハの話をきいて、暫くの間は黙つて考へてゐましたが、やがて悲しさに、

『スムハの話でよく解つた。さういへば、私も幼

いよ。そこをよく考へて、夜が明けたら早速、王様に御相談して、その上で決める事にしようぢやないか。』スムハが、かう言つたので、皆の者は成程と思ひました。そして、其の晩はおとなしく眠りました。

二

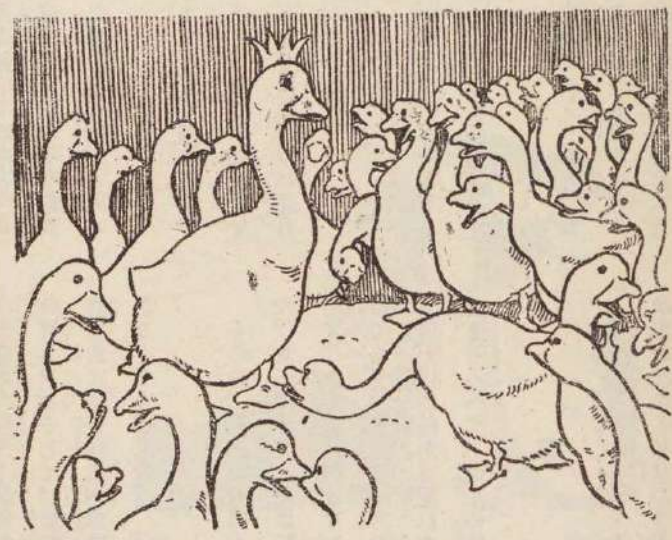
翌朝お日様が、山の上へ出ました。すると、何千といふ山中の鷺鳥が、ガツガ〜と鳴きながら王様の住つてゐる洞穴の前へ集りました。王様は、みんなの騒しい聲が聞えるので、何事かと思つて外へ出ました。

『何ぞ變つた事でも出來たか。それとも私に願ひでもあるのか。私の力で出來る事なら、何でも上げて上げるから遠慮なく言ふがよい。』

い時に智慧のある老人たちから「蓮華の湖」の話

を聞いてゐる。しかし、この話をしてくれた老人が「その湖へは決して行くな。そこには恐ろしい人間がゐるから、山へ歸りたいと思ふ者は、決して行くな」と幾度も私に話してくれた。それだから私はどうあつても、皆をその湖へ行かせたくないのだ。』

かう王様がいはれますと、聞いてゐた鷺鳥たちは、めい〜心の中で思ひました。『王様は臆病な



のだ、昨日行つた者は、みんな歸つて来たがやないか。危険など少しもある譯がない。』そう思つて、王様を怨むやうに見ました。その時、スムハが再び王様に

『王様、只今のお言葉はごもつともて御座います。が、この通り皆の者は、どうしても行きたいといふてをります。ですから、どうぞこれだけは是非あゆるし下さいまし。』といひました。

そこで、王様は遂に、
『よろしい、それ程みんなが行きたいといふなら途中間違ひのないやう、私も一しよに行かう。』と、いひました。

しかし、何故王様はゆるしたのでせう。もし、自分がゆるさなければ、みんなはさつと隠れて行くに相違ない。それ位なら、却つて自分が連れて行つた方が危険が少ない。と思つたからでした。

ので、それを捕る事を職業にしてゐました。

ところが、この村に一人の若い獵人がありました。この男は大層働き者でしたから、その朝も未だみんなの寝てゐる頃に起きて、湖へ出かけて行きました。そして、いつもの様に罾をつくつて、よい獲物のかゝるのを待つてゐました。獵人はその時、何気なく山の方を見ました。すると、まアど

うしたといふ事てせう。空の色は黄金色に變つてゐました。そして、雲のやうなものが、次第に近づいて来るではありませんか。獵人はびつくりして眺めてゐましたが、そ



王様がやうやく承知したので、鷺鳥たちは大喜びでした。そして、明日の朝は太陽が山の上へ出ない内に、王様の洞穴の前へ集るといふ事に相談がまとまりました。

その晩、鷺鳥たちはちつとも眠りませんでした。おいてきぼりにされたら大變だと思つたからです。夜がまだ明けない内に、山中の鷺鳥は一人のこらず、王様の洞穴の前に集りました。そして、太陽が山の陰から現れたのを合圖に、皆な一樣に翼をそろへて、蓮華の湖へ向つて出立しました。

三

「蓮華の湖」から遠くない處に、一つの村がありました。こゝに住つてゐる人たちは、みんな獵人でした。毎日湖へ餌をさがしに湖山の鳥が来る

の内にもと考へつておりました。

「これはきつと、黄金の鷺鳥に違ひない。大昔、月山」に住んでゐる金黄色の鷺鳥が、この湖へ来たといふ話をきいてゐる。こいつは、巧いぞ。村の者が寝てゐるのを幸ひ、俺一人て百疋もつかまへて大儲けをしてやらう。』かういひながら獵人は大急ぎで、鷺鳥の下りて来そうな場所へ罾をかけた。そして、直ぐ村へ歸りました。それから

獵人は、黄金の鷺鳥の來た事を誰にも氣附かせない様に思つて、村の獵人を大勢あつめ一生けんめに面白い話をしてやつてゐました。(つゞ)

雪の神さま

横山 壽 篤



孝作は素足に草鞋ばきで、薄い草蓆を身體にまどうて、進まぬ勝ちの馬を鞠しく、お家へ歸るのでした。

雪は孝作と馬とを、包圍攻撃でもするやうに、四方八方から降りかゝります。此處は盛岡の城下から三里ばかりはなれた處です。孝作の牽いてゐる馬は、栴檀が原のまん中遊んで来た頃から、ど

うしたとか急に進まなくなりしました。
『どうしたの、これしきの雪に、私が先に立つて歩いてゐるではないか』と孝作は、足ののろい馬を叱るやうに云つて、後へ向いて馬を見ますと、尾から背中から、雪が白く積つてゐて、見るからに寒さうでした。そこで孝作は、屈かぬ手を無理に伸して、その雪を拂ひのけてやりました。手が

後足の分を取りかへてやりました。

と其時、何處から来たのか、一羽の鳥が、かあともいはずに飛んで来て、鞍につけてあつた小さな包みを啣へて、ぱた／＼と羽音をさせながら逃げて行きました。それと見た孝作は驚いて、思はず四五歩も、その後を追つかけました。

『あ、それを持つて行つては困るよ、それは食べものではないのだ。薬だよ、薬だよ、苦み薬だよ。』と云ひましたが、鳥は半丁ばかり向ふの松の木まで飛んで行つて、その枝にとまりました。孝作は、

『困つたなあ。』と云つて、見渡す限り眞白な中に、只一點、眞黒な鳥が松の枝にとまつてゐるのを見つめてゐましたが、

『青、一寸待つてゐいて、私はあの薬を取り返して来るからな。』といつて、ぱた／＼と雪を蹴立て

屈かぬ等です、孝作は未だ九歳の少年でした。

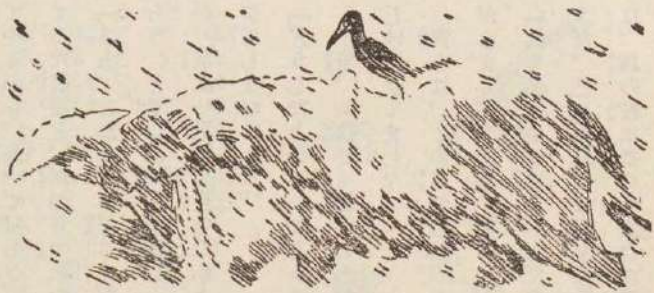
『寒いなあ、併し歩けば温かになる、さあ斯うしてやるから、急いで歸らう。』と孝作は、自分の着てゐた蓆蓆を、馬の背中にかけてやりました。

『まあ、行かう。お母さんが待つてをられるであらう。』と孝作は馬の手綱をとつて先に立ちました。馬は一足二足歩いたかと思ふと又、立ちどまつてしまひました。

『どうしたと云ふのだらうなあ、今日に限つて、……青、お腹でも痛いのかね。』と孝作は氣づかはしげにさゝました。

青とは、この馬の名前です。青は雪に降られながら立ちすくんで、歩かうともしません。

『はい、あ、足が冷たいのだな、昔も大分切れたやうだ、どれそれでは杓をしかへてやらう。』と孝作は、馬の鞍に括つてあつた藁杓を解いて、切れた



て、鳥のとまつて
ゐる松の木の下ま
て行きました。

「鳥さん、あやし
いものならお前に
あげてもいいが、
それはあつしいも
のではないよ。私
のお母さんが病氣
でね、長い間床に
ついてゐらつしや
るので、其お薬を
買つてきたのだ、
返しておくれ。お

前さんは薬つてものを呑んだことはあるまいが、
苦味ののだよ、返しておくれ。早く歸つてお母さん

に上げたいのだからね。」と孝作は、薬の包みを囀
へて松の枝にとまつてゐる鳥を見上げて頼みまし
た。すると、鳥は「かあ」と一聲鳴きました。喙に
囀へてゐた薬の包みは、孝作の前にぼたりと落ち
ました。

「ありがたう鳥さん。お前はこの雪で、食べるも
のが見つからなくて困つてゐるのだな、それでは
私の家へ一緒にい出て、青に食べさせるものが出
来てゐるだらうから、青にさう云つて分けてあげ
よう。」と孝作は鳥にいひました。

孝作の家では不幸なことばかりつゞいて起りま
した。お父さんは身體が弱つて、十分働けなかつ
たものですから、お上へ納める年貢が出来なかつ
たのです。それ故お父さんは牢に入れられました
た。するとお母さんがそれを心配して、とうとう
病氣になられたのです。孝作はほかの子供のやう

て來ました。

に、もう遊んではゐられなくなりました。何かし
てお母さんを養はなくてはなりません。お母さん
に薬を買つて上げて、早く達者になつて貰はなく
てはなりません。そこで名主の家の馬を一匹貸し
てもらつて、毎日、雨の日でも雪の日でも、
村から町へ荷物を通んだり、人を乗せたりして、
少しばかりの駄賃を得て、お母さんと二人で暮し
てゐるのでした。

孝作は薬の包みを大切に内懐にしまつて、雪の
中に立つて待つてゐる青の處へ、駆けて來ました。
すると、鳥も其後から飛んできて、青の背中に乗
りました。

「鳥さんお前は私の云ふことをきいてくれたね。
どうもありがたう。さあ青、歸らう歸らう。鳥さ
んも一緒に、道連れは多い方がいいや。」と手綱を
牽いて歩き出しますと、今度は青も威勢よくつい

かうして六七間も歩いたかと思ふと、青の背中
に乗つてゐる鳥が、孝作の目の前へ飛び出して、
ばた／＼と飛びまはつて、お家へ急いで
歸らうとする、孝作の邪魔をしたり、青の鼻の先
をかすめて飛んだりするので、青は又立ちどまり
ました。

孝作はもう困つてしまひました。

「こんなに雪が降つては、全くお前たちも可愛さ
うだ、まて／＼、私が今、お天道さまにお願ひし
て見よう、雪はもう降らなくてもいいなあ。」と孝
作がいひますと、青はあの長い顔を「さうです、
さうです」といふやうに、二三度縦に振りました。

「あ、天道さま、雪の神様、もう雪は澤山でござ
います、今年も之れて豊年でございます。この
上向もお降らしなされては、却て百姓がこまりま

す、もう今日は歇めにして下さいませ、お願ひです。」と雪の上に蹲踞して、お願ひをしました。

雪は小降りになりました。あたりは急に明るくなりました。鳥は左様ならともいはずに、向ふの方に飛んで行きました。孝作は鳥を見送つてゐますと、つい目の前にひよつくり人影が見えました。

「これ〜、今此處へお出でなさるお方に、無禮のないやうに氣をつけておくれ。」と其人が孝作に向つていふかと思ふと、直ぐ一人のお爺さんが孝作の前に立つてニコ〜してゐました。

お爺さんは頬から頤にかけて眞白な髯をはやしてゐました。冠つてゐる笠も、着てゐる着物も雪で眞白でした。孝作はそのお爺さんを見て、

「あなたは、雪の神様でせう。」といひました。お爺さんはニコ〜と笑ひながら、黙つてゐました。「お爺さん、あなたは私が今頼みした雪の神様

ですね、あなたが、眞白な髯をしてゐらつしやるので、私には直ぐ分りました。あゝ雪がすつかりやみましたね、雪の神様どうもありがたう。」といつて孝作はお爺さんにお禮をいひました。お爺さんは、も一人の人と顔を見合せて唯笑つてゐました。孝作は、

「でも雪の神様、あなたはお荷物なんか持つて、旅仕度ですね、何處へお出でなさるのですか。これつさり他所へ行つておしまひになつては村の人が困ります。私は只、今日はもう雪は澤山ですといつた丈です。ほかへ行つて下さいといつたのでありません。遠い處へ行かないで、やつぱりこの近くにゐて下さい。」といひました。

「あゝ、私を雪の神様ぢやと云ふのか。」とお爺さんは初めて口をききました。そして、

「よし、よし、私はどこへも行かぬ、これからは

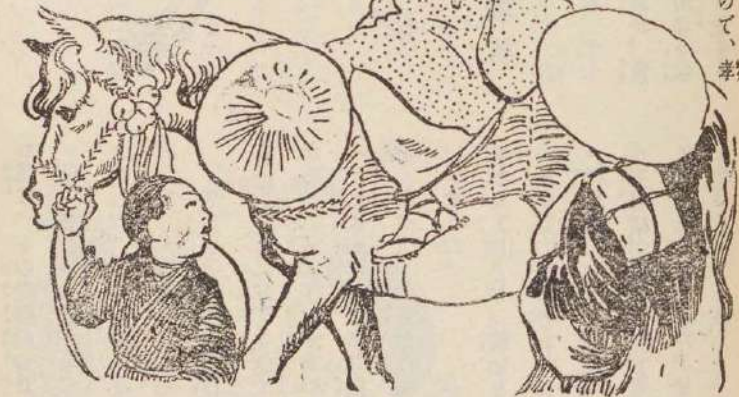
前のお家へ行かう。」と優しくいひましたので、孝作は、

「えつ、私の家へお出で下さるか、あゝありがたい〜、これ青、雪の神様が私の家にお出でなさるのだ、乗せてあげておくれよ。」と青に向つて云ひますと、青は

「はら畏りました。」といふやうに、うなづいて見せました。

「さあ、この馬の背にお乗りなさいませ私が牽いてまゐりますから。」と云ふと、

「これは有りがたい、それでは乗せて貰はう。」と、お爺さんは青に乗りました。そしてお爺さんは、つれの人に向つて、



いひますと、其人は、

「おそれいります。」と丁寧に挨拶しました。

みなさん、このお爺さんを一體誰だと思ひますか。これこそは水戸黄門光圀公なのです。桔梗が原で青が進まなかつたのも、烏が薬の包みをとつて手間どらせたりしたのも、この感心な少将孝作を光圀公に逢はせようとして、したことはなかつたでせうか。つゞく



提燈祭
橘逸雄

支那では、毎年、陰暦の一月十三日から、十七日までの間、提燈祭といって、赤や、黄や、青や、いろ／＼の色の提燈に火をつけて賑かなお祭をします。私がこれから、皆さんにしやうとする

中では、二人の仙人が、白い髯をいぢりながら、将棋をさしてをりました。王鄭は将棋が大好きなので、薪をとる事も忘れて、見てゐました。しほひには、夢中になつて、仙人の傍まで行きました。暫くすると、勝負がついたので仙人たちは、将棋盤の隅に積んであつた、棗の實を擲つて、おいしさうに喰べました。王鄭はその時大層お腹が空いてゐたので、自分も喰べたくなりました。で、「私にも一つ下さいませんか。」と言ひました。「いや／＼これはあげられない。これを喰べると、お前さんは急に歳をとるよ。五百年も歳をとつてしまふよ。それでもいいならあげやう。」といつて、仙人はなか／＼くれませんでした。王鄭は仙人が戯談をいつて自分をからかつてゐるのだと思ひました。そこで、いろ／＼たのんで、やつと一つもらつて喰べました。それはあつし、

お話は、その提燈祭の日の出来事です。

昔、支那の片田舎に、王鄭といふ若い百姓があらりました。おかみさんとの間には、二人の子供があつて、大層楽しく暮して居りました。

ちやうど、一月十三日のことです。王鄭は朝早く、薪をとりて家を出ました。二丁も行くと、後から、二人の子供がおひかけて来て、

「お父さん、今日から提燈祭ですから、なるだけ早く歸つて、お提燈に火をつけて下さいね。」といひました。

「あゝよし／＼、薪をとつたら、すぐ歸るから、おとなしく待つておいで。」と言つて、王鄭は山へ行きました。

王鄭は、薪をさがしながら、ずん／＼山の中へはいつて行きました。すると妙な洞穴の前へ出ました。王鄭はこは／＼、中をのぞいて見ました。

おもしろい葉でした。

すると、ふしぎではありませんか。王鄭は見る見るうちに、白髪の爺さんになつてしまひました。

「それぞらん、急に年をとつてしまつた。お前さんが棗の實を喰べてから、もう五百年もたつたのだよ。嘘と思ふなら、お前さんの村へ歸つてご



らん、見ちがへるほど變つてゐるから。」と、仙人はカラ／＼と笑ひながらいひました。

王鄭は大層驚いて、自分の村へ歸りました。なほほど、仙人の言つたやうに、自分の村は、見ちがへるほど立派になつてゐました。ちやうど、その日は、提燈祭で、どの家でも、どの家でも、きれいな提燈がつるしてありました。しかし、王鄭はどうしても、自分の家がわかりませんでした。

すると、そこへ、お祭の行列がまゐりました。王鄭は道ばたに立つて、ちつと見ておりましたが、行列のしまひに、乞食のやうななりをしたおかみさんが、二人の子供をつれて通りました。よく見ると、どこか自分の妻や子に似てゐました。しかし、あんまり見すばらしいなりをしてゐたので、隣にゐたお婆さんに「あれは誰ですか。」と、聞いて見ました。

これから月の世界へ行つて、兎に「不老不死の薬」をもらつてお飲み、さうすると、お前さんは、いつまでも／＼生きてゐられるよ。』

「え、私はないが、生きてくはありますか。せん。たゞもう一べん昔のやうに若くなりたすのです。』

と、王鄭はうらめしさうにいひました。

「は、あ、それで悲しんでゐるのだな、これでは月の世界へ行く途に、白い草の生えた所がある。そこには、龍が住んでゐて、白い草に火をつける



六四
「あれはお前さん、王鄭といふ人の子孫なんださうです。何でも、今から五百年も昔、王鄭といふ若い百姓が、けふのやうな提燈祭の日に、薪をとり山へ行つたさうで、歸つて來なかつたといふ話です。それからおかみさんは大層貧乏して、しまひには乞食になつたさうです。今通つたかみさんは、その王鄭といふ人の子の、その子の、その次の子の、づつと次の子なのですよ。」と言つて、お婆さんはくはしく話してくれました。

王鄭はお婆さんの話を聞いて、ます／＼悲しくなりました。しかし、しかたがないので、また、山の洞穴へすぐ／＼歸つて來ました。

仙人は、王鄭が泣き出しさうな顔をして、歸つて來たのを見て、聞きました。

「お前さんは、急に歳をとつたので、悲しいのかい。それなら、わしがいゝことを飲へてあげよう。

と、龍がそれを消さうと思つて、水を吐き出すから、その水をとつて行つて、兎の「不老不死の薬」とませて煉つておもらひ。それを飲むと、また、急に若くなるよ。今に鶴が來るから、それに乗つて、月の世界に行つてあいで。』

と、仙人はいねいに教へてくれました。

やがて鶴がとんで來ました。王鄭は鶴に乗つて青空高く飛んで行きました。あたりは、どこを見ても雲ばかりでした。

そのうちに、向の方にまつ白な草が見えました。

「龍のあるのはこゝだな。」と思つて、王鄭はすぐ、白い草に火をつけました。火は見る／＼うちに、ばアとひろがりました。するとどこからか龍が出て来て、

「ほう、火がついたのだな。己が一消しに消してやらう。」といつて、龍が大きな口を開けて、ふうと息を吹きかけました。と、龍の口から、小川のやうになつて、水が流れ出ました。それでもまだ、火が消えなかつたので、また、ふうと息を吹きかけました。こんどは、水が大川のやうになつて、流れ出ました。それで火はすっかり消えました。王鄭は急いで、龍の吐き出した水を甕の中に入れました。そしてまた、鶴に乗つて、どん／＼、月の世界をさして昇つて行きました。

それから、しばらくして、鶴は月の世界へつきました。王鄭はさつとく、兎の家を訪ねて行きました。

「もうお提燈をつけるじぶんなのに、お父さんはどうなすつたのでせう。」といふ自分の子供の聲が聞えました。王鄭はとび上るほど喜んで、

「兎さん、兎さん、早く歸らして下さい。私の子供が待つてをります。」と言つて、たのみました。

そのうちに、薬ができたので、兎は、
『さあ／＼、これをおあがりなさい。今に、あなたのおかみさんや、お子さんたちにあへますよ。』といつて、兎は王鄭に、薬を渡しました。

王鄭はその薬を飲みました。すると忽ちもとのやうに若くなりました。それと同時に、さつきの



した。そして、月の世界へ来たわけを、くはしく話しました。兎は大層氣の毒に思つて、

『では、これからすぐ、あなたのお望みのお薬を煉つてあげませう。その間、あなたは、こゝに二つの窓がありますから、順番に開けて、外をごらんください』といひました。

王鄭は、一つの窓をあけて、外を見ました。

『おや、これは昨日私が行つた町だ。』といつて、王鄭は大層おどろきました。兎は薬を煉りながら、
『それは「今の窓」といつて、そこから見ると、今のことが残らず見えるのです。もう一つは「昔の窓」といつて、その窓から見ると、昔のことが見えるのです。』といひました。

王鄭は、もう一つの窓を開けて、外を見ました。すると、昔の自分の村が、手にとるやうに地をさした。自分の家も見えました。

窓が急に大きくなって、そこから、自分の村へ行く、長い長い段々があらはれました。

王鄭は大喜びで、兎にお禮をいつて、月の世界を出ました。そして、長い段々を降りて自分の家へつきました。

お父さんの姿が見えなくて、子供たちは嬉しうに駆けつて来ていひました。

『お父さん、さつきからずかぶん待つてゐたのよ、早くお提燈に火を點て頂戴。』

王鄭は、その日の出来事を、誰にも話しませんでした。そして、赤や、黄や、青や、いろ／＼の色の提燈に火をつけて、その晩、みんなと一しよに楽しくお祭をしました。(をほり)



琉璃、瑪瑙、
 寶を山と
 背に積んだ
 鹿が一匹、やつて来た。
 ねがひを秘めた
 銀の匣、
 晨目醒めて
 手に取つて
 ふと眺むれば
 浮彫に
 夢で見たやうな
 繪があつた。



銀の匣
 西川 勉
 初夢の
 ねがひを秘めた
 銀の匣、
 そつと枕の
 かたはらに
 置いて眠れば
 夢のなか、
 雪のつもつた
 庭先に
 珊瑚の枝や、



幼年詩

雪 (賞)

名古屋 林

芳雄

雪の姫様着物をはらへば
さらさらさらと雪がふる

小さい雪も

大きい雪も

坊やのねてるるるの中に

そつと降つて積ります

評 雪の様に静かなきれいな歌です(牧水)

百舌鳥 (賞)

千葉渡邊 知信

もず、もず、もんず、
もんずがタガ方、

キイ／＼キイと啼いた。

曠日の朝は、

霜が白いぞ。

蛙の磔、

見附けもやへ。

評 百舌鳥の啼聲に似た鋭い氣持のよい作

だと思ひます(牧水)

や ま

室山 禮二

ねむつて居る様な森

風が時々々

ゆすりおこしますが

又ねてしまひます

風もねむりました

お堀の水もどんよりよ

しづかになりました

からすが森でねて居ます

評 落ちついて少しもから騒ぎのない調子

綴方

徒歩競走 (賞)

朝鮮大邱公立高等小學校五年
石井登美子

長距離競走や紅白球送りがすむと、
藤本先生は「さあ五年の女子だ」とお
つしやる。私たちは「あらかけあしだ。

どうしやう／＼」といひながらチニス

コートへ集つた。一組の人がずらりと

出發點へ並ぶ。胸のどろろ音が早がねの

やうだ。そのうちにズドンといふ鐵

砲の音、一組の人は一さんにかげだし

た。

二組三組四組五組と、追々すんでい

よ／＼六組、私達の番はきた。ズド

ンといふ合圖、十人はとぶやうに出發

點をはなれた。見ると河さんが一等で

私は二番にゐる。ハツと思ふとた、

後の小淵川さんが追ひこしてしまふ

七〇

一週はすんだ。あと一週といふ時、すぐ

後から大きな足音がして、誰かと近づ

いてくるやうだ。ぬかれてはいけな

い、けんめいに走るが、氣ばかりあせつ

て、足が自由にならない。あと半週とい

ふ頃、遙々ぬかれてしまふ。見るとそれ

は安部さんだつた。決勝點はだん／＼

近づいてくる。ふりかへつて見ると、中

山さんが又追つかけてくる。よろける

やうになつて、やうやく決勝點へとび

込む。審判の藤本先生が大きな聲で「四

等」とおつしやつた。

小犬 (賞)

山口熊柳井小學校三年
松重喜代子

きのふの夕方、私がおしやうゆを買

ひに行く道に、白と黒のまたらの小犬

が一匹居ました。ここへよそのをささ

が車をひいて来ました。小犬はにけ

やうともいたしません。しかれるかと

思つて見てゐるうちに、車はとうとう、

はげがさめるやうに」と言ひながら、

私の前へ猫を出しました。私は「キャ

ツ」といつて、内へ逃げこみました。は

じめちやんは笑ひながら、「ふみちや

ん猫なもの」と言つて、私に見せまし

た。私はその時はじめて目がさめました。

齒

東京市西橋本小學校六年
今村重雄

僕は朝寝なので學校へ行く時間が間

に合はない時がすい分ある。だから顔

を洗ふ時もぞんざいにやる。齒などは

ゆつたにみがかかないからだん／＼齒が

きたなくなる。よく母さんに「そんな

に齒をみがかないと齒が皆くさつてし

まふよ」と言はれた。けれど僕は平氣

でゐた。

所が此の間急に齒がいたみだして、

口の中をきりできされる様だつた。母

さんは「それ見ろ」と言はれた。け

七一

がようございます。(牧水)

秋の雨

徳島長田重治

ほつちん とつちん秋の雨

あつちの山にも秋の雨

こつちの山にも秋の雨

天のおばさん大いそぎ

評 小供らしいすなほさが出てゐます (牧水)

お祭

徳島岸本 爽

夕方

銀のお月餅金の稲をてらす

今年(今年)は豊年

明日はお祭とんどにどん

お留守番

東京大川澄夫

私は寂しいお留守番

カラツコラ、カラツコラ、

だあれ、バ、ちやん

カラツコラ、カラツコラ、

やつぱり 違つた。

私は寂しいお留守番

カラツコラ、カラツコラ、

だあれ、マ、ちやん

カラツコラ、カラツコラ、

やつぱり 違つた。

馬

福井南部源太郎

ボカ／＼／＼／＼お馬がかける

山こえ川こえ里こえて

かけろよく／＼お馬がかける

ボカ／＼／＼／＼お馬がかける

町こえ村こえ森こえて

走るよく／＼お馬がかける

北海道旭川北沢小学校尋三 菊地 猛 夫

れどそのまゝではたまらないので、「これからみがくから」とあやまつて薬をつけて貰つた。そしたら一時間ばかりしてやつと直つた。その明日からいやく歯をみがく事にした。

だりや

京福府網走村小学校尋三 山口 勳

うちの裏には、五六本のだりやがうゑてあります。夏にはたくさんさきました。今は白が一つひらいてゐます。そばには、たくさんのつほみが、すゞのやうになつてゐます。いまにひらくでせう。

ふるいのは、かぜのふくたびに、火花のやうに散ります。しやせいするときれいだらうと思つてかきました。うまくできないのでかきなほしました。そのだりやは、お父さんのほねをおつてつくられたのであります。

うちのねこ

七二

ふと目をさますと、夕べまできれいであつた本箱が、めちやくちやになつて居る。又本もほろほろになつて居る。どうしたことか、びつくりしておき上つてあたりを見ると、僕がはいがつて居るねこが、へやのすみでじやうて僕の大じな本のふちを一しようけんめいかちつて居る。「こら」と大きいこゑでどなると、一もくさんに外にけつて行つた。僕はすぐおきて、おびもしめないでおつかけて行つた。ねこはすぐ木に上つたから、僕もとくるの大上りをしてつかまへようとすると、ねこはすぐ木からとなりのへいの上にとびうつつて、どこかへ行つてしまつた。僕はしかたなしに家に入つて本をかたづけた。

土はしの祭り

愛知県豊田第三小学校尋四

福井 野 義 男

土はしのおまつりに、もちなけがあつた。ほくは學校で、もちなけがすんでしまはないやうにといつてゐた。學校から早く歸つてもちひろひにいつたいつて見るとまだはじまつてゐないので、おとうさんの所へいつてはなしをしてをつた。すると、にはかに人がまわきだした。びつくりして見ると、なけるはじめであつた。人はみな「おいさあ／＼」といつてさわぐので、おとうさんがほくの所へきて、「こんな所にゐるとつぶされてしまふぞ」といはれました。ほくはすぐすまの方へいつてひろつてゐた。ほくの方へおもちはたくさんきた。けれども二つ三つしかひろへなかつた。

ふきちやん 朝鮮大丘公立小学校尋五 浅井 雪 子

ふきちやんは三つで、くる／＼と太

つたおいた盛りの子供です。いつも小さな犬の片足をつかんで、ぐる／＼ふりまはして、犬がきやんきやんといつてゐるのを面白がつてゐます。「ふきちやんそんなにするんじやありませんよ」と小母さんがおつしやると、だまつて犬を放してやります。「ふきちやんおんぶしてあげませう」と私がいふと、「いやよ、いやよ」とわかりもしない言葉でいふくせにすぐ私の背中におぶさつて「あつち、あつち」とゆびさします。君子さんが「まるで／＼」とおつかけると、ふきちやんはせなかの上で、きやつきやつといつてあべれます。何だかぐつたりしたと思つたら、せなかから落ちさうになつて、ぐつすりねこんでゐます。

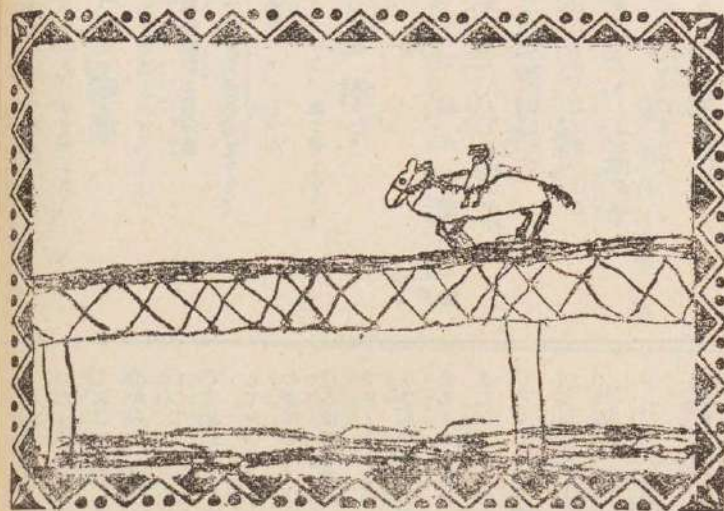
私の家の庭

大阪府天王寺師範附屬小学校尋三 柏木 久 子

七三



守村岡 五登校學小賀久縣葉千 「店 茶」 畫由自



人全 木橋 一登校學小田宮縣野長 「上の橋」 畫由自

私の家のお庭には、花がたくさん咲いてゐます。一番目に立つのは日まはりで、其次は朝顔や、けいとうなどです。日まはりはお庭の周囲に植えてあります。背は屋根よりも高い位でそのさきに大きな花が咲いてゐるので空に黄色の花輪をかけた様に見える、朝顔は小さなつばの様に赤やしほりや紫などが交つてゐるのできれいです。てあらひばちのよこに、かきねがあつて、朝顔はここで毎朝咲くのです。隅の方には金魚ばちが二つあつて、一つの方には金魚が六匹入れてあります。ふやうどんをやると、よろこんでたべるので、學校から歸ると毎日えさをやります。

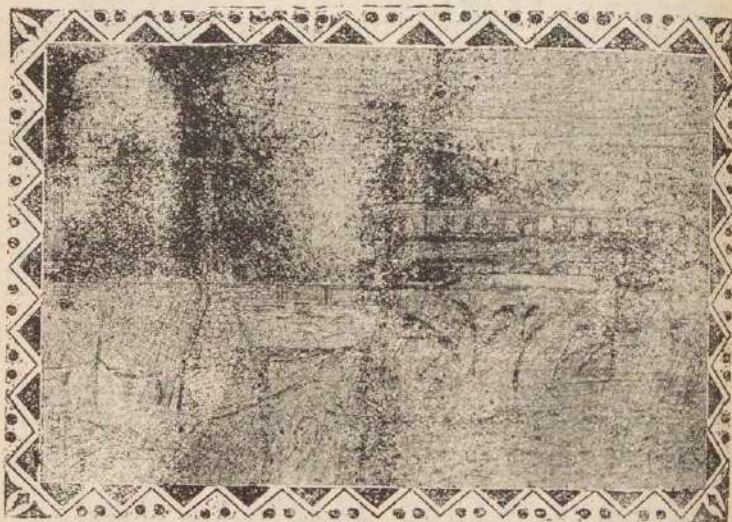
びやうき

山口縣柳井小學校三年 善一

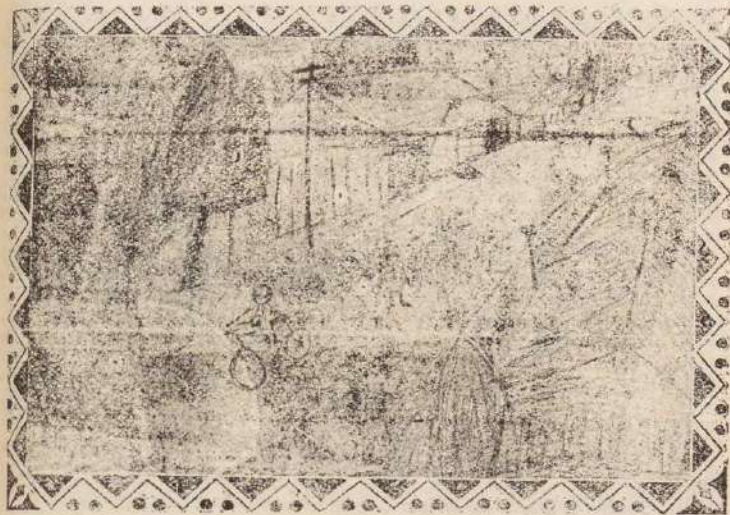
きのふ學校からかへつて、秋本君のうちに遊びに行きました。そして二人でまりなけをして遊んでゐるうちに、あたまがいたくなつたのでかへりました。その時秋本君はうちのちかどまで来てくれました。秋本君とわかれてうちへかへつて、おかあさんに言ひますと「かぜをひいたのだからねてるたらよからう」とおつしやいました。それでふとんをしいてもらつてねました。目をままして

見るともうでんとうがついてゐました。あたまはまだなほつてはあませんでした。その時おとうさんにたいをんきでねつをはかつてもらひました。おとうさんは「少しのほつてゐるがたいしたことはない」とおつしやいました。それから夕ごはんを少したべて又ねました。こんど目がさめたのは十時ごろでした。あたまの中でなにかまはつてゐるやうな心持ちがして、なかなかねむられませんでした。が、いつのまにかねむつてしまひました。けさはのとがわるくてこゑがよく出ないので、みかんを一つたべて學校へ来ました。

口金作 △見島人と僕(柳井 武尾三) △おはなし(柳井 米村 不二男) △僕のまり(山口 秋本恒雄) △きのふのひるまで(山口 森一美) △第(山口 高木シヅ) △わづみ(山口 秋本恒雄) △もみじの葉(山口 柳岡キミエ) △隣の馬ちゃん(兵庫 松下貞三) △はぜ釣(兵庫 口野静男) △ゆしと膳(兵庫 石谷留吉) △和之さん(愛媛 矢野公美) △蛙(愛媛 白石章一郎) △猫と鼠(兵庫 石谷才二) △お祭(愛媛 山口豊) △祭(愛媛 佐藤八十一) 手のおれた時(愛媛 光岡金二) △内ノ小箱(鹿児島 萩原アイ子) △夕立(鹿児島 工藤文子) △隣の柿(福島 佐々木やす子) △かはいらしい柿(福島 加藤マナコ) △柿を買つた朝(福島 中村イキ) △子犬(福島 今泉シヅ) △野獲(福島 澤井久子) △夕方(埼玉 齋藤道也) △水直(大阪 中村昌子) △弟の死んだこと(大阪 佐藤忠) △おやすみの日記から(大阪 平野孝介) △東京へ行つてしまふ(岡田君(大阪 前田秀雄))



山内 西尋校學小川小西市京東 外郊 畫由自



村木 三尋校學小内城縣岡靜 町の舍田 畫由自



信 通

集つた畫を見て

山本 鼎

七六

△真い畫が、たくさんありました。けれども、どれかの畫をまねしたやうな繪もありました。畫をまねしてはいけません。
 △それから、うすぼんやりと描いた繪もたくさんありました。藤田ふき子さん、青邊隆さん、木村三郎さん、なんかの畫もあんまりうすぼんやりしてゐるので、寫眞の版に寫す事が出来ません。こんどからはもつと濃くかける鉛筆をおつかひなさい。
 △森野獨香さん—あなたは、どんく／＼生をしなさい。物の形に氣をつけて。きつと真い畫が出来ますよ。
 △田中重三さん—君は、定木で描く事をおよしなさい。定木で描いた方がいゝのは用器畫の時だけです。
 △山内右文君の畫も、木村君の畫も面白い畫です。人まねでなく、自分の見た通りのものを描いたからです。それから鉛筆の線もはつきりしてゐますから。
 △なんにしる、どんく／＼お描きなさい。
 雲達の近所の景色でも、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、見さんの顔でも、お祭や、火事や、電車や、動物でも、

大や、猪や、馬や—なんでも、君たちの描きたいものをかつてに描いて見せて下さい。自ら先生は君たちの畫が大好きなんです。
 △橋本政治君の畫は、田に居つてあるカンテラのあかり、夏の蟲が集つて居るのをお百姓が寝をさげてりて来て居る所をかけたもので、たいへん真い繪なんです。念な事には背や、うす色の鉛筆で描いてあるので、寫眞の版になりません。すてべて青い色は寫眞にとると、うすぼんやりとします。これとあべこべに赤い色や黄色は寫眞にとると濃くなるのです。
 △池田香さん、今度は寫生したのを送つて下さい。
 △梅花君、雜圖の新美玉様ちゃん、もつとほかの繪を見せて下さい。きつともつと面白いのがあるでせう。

□「金の時」を本屋へ行つて見つけました。そしてすぐ買つて歸りました。この本の題名は、山内君の畫ですが、その中でも最もすぐれた一つであらうと、ひきました。表紙や口絵は甚だ、心しました。(わかさ、S.K.生) (S.K.さん、書評の分あります)
 □わかりやすい、話、面白い繪、第二回は、大層面白うございました。先生方の畫論も赤い鳥の繪にむづかしくなく榮達にとつて大變よろうございました。たゞ來週から讀方や幼年詩に批評をつけて下さい。それから自由畫は投票する時折つてよいのですか(東京、今村重雄) (折つても差支ありません 記者)
 □私は今迄赤い鳥を買つてゐました。然し持があまり笑ふので中学生にかへましたが、やつぱり童話や童話の好きな私には中学生はむきません。で又赤い鳥を買ひましたが、中冷がぬけたので面白くなく思つてをりました。私はかゝる時に本誌の出版されたのを、く喜びます(都、石田幸光)
 □私はもう中學校(一年生)ですが、未だ、幼幼年時に投票するだけの資料がありませんか。(三重、S.N.生) 資料は別にきまつてゐませんか。どんなつても投票して下さい(記者)

七七

少年少女諸君の綴方を讀んで

たいへんいゝ綴方がたくさん來ましたので、讀んで思ひます。なかでも、石井さんの「徒歩(徒走)」は、いきいきとした筆で力強く書いてあります。あれだけでよく徒歩(徒走)の有機や競走してゐる人たちの心もちがはつきり出てゐます。しかし皆さん、気がつきませんか。たつた一所いけのない所があるのです。それは、胸のどろきが肩がれのやうだ。と、いふのです。これはきつと、さういふ風に感じられたので、はなれて、何か讀本か、雜誌でも讀んでおぼえられた言葉だらうと思ひます。かういふ風に自分のほんとうに感じたことでないことをほんとうに感じたこととやうに書くのはいけません。これは決して石井さんばかりではないのです。皆さんもよく知らず知らずのうちにかういふことをお書きになるのです。自分のほんとうに見たこと、自分のほんとうに思つたこととなければ、決して書いてはなりません。綴方は正直に書くものです。上手に書かうと思つてはいけません。自分の見たことと、自分の感じたことをすらすらとすなほに書いてごらん下さい。きつといゝ綴方ができるのです。

佐作のうちでも、武尾君の「見物人と僕」や、秋本君の「僕のまり」や、山口君の「きのほのひるまで」などは入選の部に入れたかたに思ひます。たいへんいゝ作でした。それから、光岡君の「手のおれた時」も子供らしい氣もちのあらはれたいいものでした。地方の言葉で書いたところは、こゝろこゝろと

てゐましたが、少し分りにくかつたのです。おしまひに、もう一言言つておくことがあります。たくさん來たうちには、何だか雜誌なんかを讀んで、うろろおぼえにおぼろろ言葉を使つて、とくになつて書いてゐる人たちがあつた。子供の時から、そんな風に氣どつた文章を書く人は決して上手になれません。(記者)

應募童話選評

△金の鼻(東京 稚名由己) △金の寶(福島 紅屋國盛) △金子行子鳥(三重 佐々紫雲) △お百姓と婿(下關 角田新) △童話の雲(鳥居 藤野) △哀れな林助(京都 服部武光) △大つづの娘(東京 藤田よし) △カクコ鳥(お伽の箱) △鳥と東(下關 角田新) △お菓子の出る箱(佐藤晴鳴)

今日迄に集つたのは、以上の十篇でありました。そのうち前の四篇は先月に届いたのでしたが、誌上に餘白がなかつたために感想を述べるのが出来ませんでした。その點は作家諸君にお詫びを致します。

私どもの求めてゐる形式に於ても、内容に於ても、新しいものある傑作を見ることが出来なかつたのは遺憾に思ひます。それに文章がもつと、洗練されなければなりません。もつとも聲調や難字などはさうでもありませんが、一般に子供の氣分に合致しなやうな純な言葉で表現して載せたいと思ひます。強に氣になるのは、大人が日常使つてゐる俗語の多い言葉が時々出て來ること

です。個々について讀後の感想を述べて見ませう。

「童話の話は新しい傾向をもつた作品でしたが、構想が少し不十分なやうなものがあつた。作務ばい、寒賀をもつた人だと思ひます。金の鼻、お菓子の出る箱、哀れな林助などは、童話としてかなり無難な作ではありましたが、いづれもコンベンショナルなものです。あゝ、いつた題材をとり扱ふにしても、必ずしも驚しみが出せないものではありませんから、落着いて解に想を練つて下すつたらいい作品になると思ひます。お百姓と婿」と泉と鬼とは二つともユーモラスな味のある作でありましたが、もつと美しい純な氣持で表現されないと、在來のお伽噺風に墮ちる作であります。カクコ鳥は童話の文章としてはあまりに難しすぎるやうです。題材は面白いと思ひましたが、後の方が浮遊風になつてゐるのが嫌です。「六つ子の鏡」はお伽噺小品としてありますから、童話といふべきものではないかも知れませんが、子供に讀ませる小品文としてもあまりに子供の氣持から懸け離れてゐる氣がします。「金の寶」や「金子行子鳥」も悪いものでもありませんが、もつと思ひ切つた獨創的な創作を試みられむことを希望します。(記者)

「通信」について、毎月種々な通信を寄せ下さいますが、誌面に餘白がないので、皆出さないが出来ないのを遺憾に思ひますが、なるとだけ都合して浮山出したいと思ひますから意味のある通信を寄せて下さい。(記者)

金の箱 誌友

- △福岡 竹内萬壽雄君 ○山梨 土橋千君 ○朝
- △三島千里君 ○福島 松田真隆君 ○長野
- 前田房徳君 ○兵庫 市毛豊君 ○長野 渡邊一
- 雄君 ○神戶 宮下誠太郎君 ○静岡 竹澤勲夫
- 君 ○岩手 八幡信吉君 ○北海道 松藤三君
- 埼玉 永田芳子君 ○廣島 高田嘉助君 ○北
- 海道 富澤武夫君 ○栃木 大島せつ君 ○青森
- 工藤貞義君 ○鳥取 齋藤素果君 ○茨城 木内
- 晋君 ○東京 弓手幸子君 ○長崎 内村又三郎
- 君 ○長野 山口武夫君 ○茨城 宮内正君 ○墨
- 郷 内野定樹君 ○長野 月岡次太郎君 ○神島
- 岸本爽君 ○千葉 津山一羊君 ○長野 山本君
- 秋田 小澤友太郎君 ○静岡 小林謙友君 ○山
- 形 本間八右衛門君 ○山形 細矢田郎君 ○山梨
- 佐藤直一君 ○長野 小林千登君 ○和歌山 尾
- 崎増次郎君 ○神奈川 前田幸次郎君 ○支那 眞
- 太田嘉平君 ○青森 平野正君 ○東城 岸 眞
- 吾吾君 ○大連 増田勝太郎君 ○奈良 大野 正
- 臣君 ○京都 西村美代子君 ○奈良 大井長太
- 郎君 ○廣島 花井清子君 ○北海道 津村操子
- 君 ○東京 黒田伊都子君 ○仙臺 中井弘次郎
- 君 ○秋田 櫻井潤一郎君 ○金澤 村井静子君
- 東京 佐藤愛子君 ○神太 池水社二君 ○滋
- 賀 山本佐喜知君 ○佐賀 島島花代君 ○大分
- 松田正二君 ○鳥取 森田悦子君 ○愛知 岡田
- 庸三君 ○上海 富澤親之助君 ○千葉 寺田謙
- 君 ○大阪 岡村定子君 ○敦賀 木村朝子君 ○
- 神戸 松本羅織君(以下次誌)

▲新巻の「こぼろぎ」は、作者某因巻報兵より、左の通りに訂正するとの御通知が有りました。

こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、

わたしは弱いこぼろぎよ、わたしは弱いこぼろぎよ、

何時も泣しく泣くばかり。

こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、こぼろぎ、

わたしは弱いこぼろぎよ、わたしは弱いこぼろぎよ、

友をたづねて泣きます。

▲正誤 「こぼろぎ」の現、新巻は印刷の誤、符に大きな間違ひをいたしました。作者に深くお詫びをいたします。そして、次の通りに訂正いたします。

こ	ぼ	ろ	ぎ	こ	ぼ	ろ	ぎ	こ	ぼ	ろ	ぎ	こ	ぼ	ろ	ぎ	こ	ぼ	ろ	ぎ
こ	ぼ	ろ	ぎ	こ	ぼ	ろ	ぎ	こ	ぼ	ろ	ぎ	こ	ぼ	ろ	ぎ	こ	ぼ	ろ	ぎ
わ	た	し	は	よ	わ	い	こ	ぼ	ろ	ぎ	よ								
を	の	も	な	け	れ	ば	き	ば	も	な	い								

子供の自由畫を募る

山本 鼎

子供諸君—こんど、この雑誌で君たちの畫をいたよいて、僕が、みんなの畫のうちから、選むだのを、毎月四つぐらゐる、寫眞の版にして出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雑誌の畫なんかを見て描いたものでない畫のことです。君たちが、かつてに描いた畫のことです。ですから、君たちは、お手本や、雑誌の畫なんかをみて描かず、花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顔なり、なんでも、君たちの好きなものを、かつてに描いてごらん下さい。

お手本を見て描いたり、雑誌の畫なんかをみて描いたものは、みんな落選ですよ。

それから、あんまり、うすく、ほんやりかいてある畫はたいそういゝ畫でも、眞の版になりませぬから、及第しても雑誌へは出されません。そのかはり、そんないゝ畫は僕が載せて、たいじに、しまつておきます。

「金の船」誌友募集

入0

「金の船」をますます立派な雑誌にすると共に、みなさんの御便宜を計るため、「金の船」の誌友を募集いたします。どうぞ御申へみ下さい。一旦誌友になつてお置きになるといろいろの特典がございます。誌友の規則を知りたい方はハガキで編輯所宛にお問合せ下さい。直ぐにお知らせいたします。

◎ 童話童話募集

吾々は、かかれたる童話童話作家を世に紹介したいが爲めに、今後毎月、童話童話を募集いたします。但し、募集に應ずる童話童話は、内容形式共に従来の古い型を破つた、新しい味のあるもので無ければなりません。併し、題材は作家の自由です。

また吾々は、讀者の標準を十二三歳のこどもに置いてますから、文章は見て、その前後の年齢のこどもに、理解される言葉をもつて、書かれたものを求めます。

原稿の枚数は童話の場合には、十行半、童話用紙八枚以内童話の場合は四號活字で二頁一杯に組まれる程度です。優秀な作品は本園に掲載作家として廣く紹介し、且相當稿料を差上げます。

△ 東京市本郷區根津宮永町廿九番地

少年少女の創作募集

(原稿は東京市本郷區根津宮永町廿九番地「金の船」編輯所へ送つて下さい)

自由畫

山本 鼎 先生選

自由畫のことは、山本鼎先生が、前頁に書いて下さつたから、ごらん下さい。

綴方

編輯局選

綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、ふだん遣つてゐる言葉で書いて下さい。

幼年詩

若山 牧水 先生選

幼年詩は山なり森なり花なりを見て、感じたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

- 自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に書いて下さい。
- 綴方、童話は用紙も字數も、みなさんの自由です。
- 住所、姓名、年齢などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。
- 人のものを重なりたり雑誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。
- よく出来たのは、雑誌にのせます、中でも優れた方には賞品をさしあげます。
- 締切は毎月十五日です。それから以後に着いたのは翌月へ廻します。

(本號に限り金貳拾五錢)

- 定價一冊貳拾錢 送料壹錢
- 三ヶ月分三冊(送料六拾錢)
- 半年分六冊(送料壹圓貳拾錢)
- 壹ヶ年分十二冊(送料貳圓三拾錢)

廣告料は御照會次第お答へいたします

- ▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
- ▽送金(小爲替)でも御手代用でも宜敷
- ▽御座います
- ▽御手代用は(壹錢)切手一割増に願ひ
- ▽御注文の場合は御手代用何れと云ふことを明瞭に書いて下さい
- ▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きください

大正八年十二月四日印刷納本(毎月一回)

大正九年一月一日發行(一日發行)

編輯人 齊藤 佐次郎
 發行所 東京市本郷區根津宮永町廿九番地
 發行所 東京市本郷區根津宮永町廿九番地
 印刷所 東京市本郷區根津宮永町廿九番地
 印刷所 東京市本郷區根津宮永町廿九番地
 發行所 東京市本郷區根津宮永町廿九番地
 印刷所 東京市本郷區根津宮永町廿九番地
 發行所 東京市本郷區根津宮永町廿九番地
 印刷所 東京市本郷區根津宮永町廿九番地

大正八年十月十六日
大正八年十二月四日
大正九年一月一日
（第三種郵便物認可）
（毎月一冊二日発行）

日の子の本

讀んで面白く
見ても面白い
幼年繪雑誌

定價壹冊貳拾錢送料五厘
半年分送料共壹圓拾五錢
壹年分送料共貳圓貳拾錢
振替東京第參〇五七貳番
發行所九段ケンノウツノ社